

地方中小都市のコンベンションビューローが国際MICE推進のために重視
する要素に関する研究
～松江、福井、山形を主たる対象にして～

首都大学東京大学院 都市環境科学研究科
観光科学域

15842409 邢 艶智

指導教授 川原 晋

第 1 章 はじめに

1-1 研究背景.....	4
1-2 研究目的.....	6
1-3 既往研究の整理.....	7
1-4 研究の構成及び方法.....	9
1-4-1 論文の構成.....	9
1-4-2 調査方法.....	10

第 2 章 研究対象地を選択した経緯

2-1 目的.....	11
2-2 人口 10 万から 30 万までの都市に注目する理由.....	11
2-3 調査対象都市の選定.....	14

第 3 章 国際 MICE の開催に影響する要因の分析

3-1 調査の目的と方法.....	22
3-2 インタビュー調査項目設計のためのプレ調査.....	22
3-2-1 5 都市の国際 MICE の取り組み現状.....	22
3-2-2 インタビュー調査を行った CB が国際会議誘致において大事な役割を果たす要素に関する認識.....	25
3-3 3CB の国際 MICE の誘致・開催現状の把握と国際 MICE の誘致に大きな影響を与える要因の分析.....	25
3-3-1 3 都市のハード面の整備状況.....	26
3-3-2 3 都市のソフト面の整備状況.....	34
①各 CB の構成や行っている業務と運営仕組みの説明.....	36
②MICE の誘致に大きな役割を果たしている地域産業、地域組織、運営システム等.....	38
③エクスカーションの企画・運営内容.....	40

④国際会議に取り組む理由.....	41
3-4 結論:国際会議誘致・致開催段階において、大きな影響を与える要因の分析	
第4章 3CBの誘致事業、調査・企画事業の展開	
4-1 目的.....	43
4-2 3CBの誘致事業の取り組み	43
4-3 3CBの調査・企画事業の取り組み.....	45
4-4 3CBの県内外主催者への誘致訪問回数.....	47
第5章 学術会議を中心とする地方都市の国際会議誘致のモデルになる仕組み	
5-1 調査のまとめ.....	50
5-2 学術会議を中心とする地方都市の国際会議誘致のモデルになる仕組みへの提言.....	52
謝辞.....	56
参考文献・資料.....	57
図表リスト.....	58

第1章 はじめに

1-1 研究背景

現在日本国内 MICE の開催は東京や横浜のような交通アクセスが良く、会場施設、宿泊・飲食施設などハード面が整備されている大都市に集中している。そして、国際的な MICE 産業の競争力強化のため、国として集中的な支援も MICE 誘致のポテンシャルの高い大都市に偏っている。2013 年 6 月には、東京、横浜市、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市、福岡市という 7 自治体がグローバル MICE 都市として選ばれた。また、2015 年 6 月に札幌市、仙台市、千葉市、広島市、北九州市がグローバル MICE 強化都市と選ばれた。しかし、大都市の MICE 施設では特定の施設の稼働率が高く、主催者からの案件を断っており、MICE 開催を取り逃している現状が明らかとなっている（松本 2016）¹。

日本の中小都市において、急速に進む少子高齢化や人口減少の影響で、地域経済も停滞している。国際 MICE の開催が地域経済の活性化、地域交流人口の拡大、地域の国際化に大きな役割を果たしており、特に経済に及ぼす波及効果が高いため、地方中小都市も積極的に取り組んでいる。地方都市は、国際アクセスや施設規模、宿泊・飲食施設の集積、知名度等において、大都市に比べられないが、地場産業、地域に立地する大学の研究特性、ユニークベニユー²に代表される地域資源などを活用することで、特定分野あるいは特定ニーズのある MICE の誘致・開催に成功した例も数多く見られる。そして、地方中小都市で国際会議を開催する際に、大都市よりコストが低く、その地域ならではの体験項目や伝統芸能、郷土料理などを満喫できることが地域での開催の魅力であると言われている。

1 松本 純「MICE 機能を通じた都市地域マネジメントの展開」（つくば大学社会システム・マネジメント, 社会工学域, 理工学群社会工学類都市計画主専攻卒業論文）

2 ユニークベニユー:歴史的建造物、文化施設や公的空間等で、会議・レセプションを開催することで特別感や地域特性を演出できる会場のことを指す。（出典:JNTO コンベンション誘致開催支援ホームページ）

日本においては大都市を対象とする国際 MICE の研究は多いが、地方都市における国際 MICE の研究が少ない。観光庁による「地域における国際会議誘致に関するアンケート調査」において、国際会議・学会の誘致が地域で有する大学や研究機関のキーパーソンの有無や、域内大学・研究機関・地元企業・商工会議所など団体との連携が重要だと明らかにしたが(観光庁 2016)³、具体的な地方都市においてどのように展開しているのかはまだはっきり把握できていない。

表 1-1 グローバル MICE 都市とグローバル MICE 強化都市の人数

都 市	東 京 都	横 浜 市	名 古 屋 市	京 都 市	大 阪 市	神 戸 市	福 岡 市	札 幌 市	仙 台 市	千 葉 市	広 島 市	北 九 州 市
人 口 (万)	92 6	370	229	147	269	153	153	195	108	97	119	96

(官公庁のホームページの情報より作成)

グローバル MICE 都市とグローバル MICE 強化都市に入っている都市が人口大体 100 万人以上の大都市である。

本研究では、国際 MICE の誘致において、それぞれの都市の MICE 誘致の格差に影響を与える要素を具体的な事例から明らかにしようとしている。地方都市の MICE の活性化が日本 MICE の活性化の鍵であると筆者は考えるため、地方都市の MICE を研究対象とする。

3 観光庁「地域における国際会議誘致に関するアンケート調査」(平成 28 年 3 月 地域の特性を活かした MICE の推進に係る調査事業報告書)

1-2 研究目的

そこで本研究では、日本地方中小都市の国際 MICE の誘致について、MICE の取り組みを主たる業務とする組織であるコンベンションビューロー（以下 CB）に着目し、以下の 2 点を明らかにすることを目的とする。

1) 国際 MICE の誘致・開催活動に積極的に取り組んでいる日本国内地方中小都市（人口 10 万～30 万）の現状を把握し、抽出した 3 都市の CB を対象に、国際 MICE の誘致に大きな影響を与える要素を明らかにする。

2) 3 都市の CB2005～2015 年の 11 年間分の事業報告書を入手し、うち主に誘致事業、調査企画事業の精査を通じて、各取組の傾向や試行錯誤の過程を把握し、今後地方都市で国際 MICE を推進するための知見を得て、提言を行うことを目的とする。

1-3 既往研究の整理

(1) 地域都市の MICE に関する研究

松本(2016)は、大都市だけではなく地方都市においても MICE の誘致開催に積極的に取り込んでいることを明らかにした。MICE を推進していくうえで地域の強みとなる資源の開発・活用によって自地域における MICE 誘致・開催の個性化や高付加価値の鍵となり、地域資源に最適な MICE を見つけ、誘致することが大切であるとしている。しかしながら、地方都市ならではの観光資源が国際会議の誘致に影響を与えるかについては、明らかにされていない。

(2) MICE 参加者の満足度に影響する要素に関する研究

岩崎(2011)は、地方都市は大都市と同じ土俵で競争しても勝ち目はないが、「ならではのおもてなし」の追求においては、都市規模は無関係であるとした。参加者へのアンケート調査の結果により、会場施設や会場へのアクセシビリティ等ハード面の整備より地域ならではの食・お土産との出会いや観光の魅力等ソフト面の要素が参加者満足度に大きな影響を与えていることが示された。これから、ならではの魅力を「MICE 参加者に対するおもてなし」として形にし、実行していくことが大切としている。

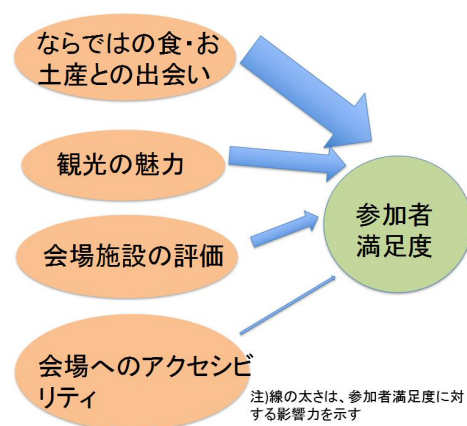


図 1.1 「コンベンション参加者満足度モデル」の構造

(「地方都市の MICE 振興戦略—静岡県取り組みからの示唆—」, 岩崎, 2011 より)

MICE は企業等の会議 (Meeting)、企業等の行う報奨旅行・研修旅行 (Incentive travel)、国際機関・団体、学会等が行う国際会議 (Convention)、展示会・見本市、イベント (Exhibition/Event) という 4 つの部分で構成されている。本研究では、そのうちのコンベンションを中心に、MICE の取り組みを主たる業務とする組織であるコンベンションビューローに着目し、地方中小都市における国際会議の誘致に影響を与える要因を明らかにする。

1-4 研究の構成及び方法

1-4-1 論文の構成

本論文は、5章で構成される。第1章では、研究の背景と目的、既往研究の整理と論文構成、調査方法を記した。

第2章では、地方都市における MICE の概要を把握し、研究対象とする CB を抽出する。

第3章では、抽出した3都市（松江市、福井市、山形市）のCBを対象に、国際 MICE の開催に影響を与える要因を明らかにする。プレ調査として、EXPO ミーティング 2016 に集まる人口 10～30 万人の地方都市の CB 担当者に MICE の取り組み現状について、簡易インタビュー調査を行った。調査から得られた情報の上に、抽出した3都市にハード面の整備状況、CBが行っている業務、MICE の誘致に大きな役割を果たしている地場産業・地域組織の存在、エクスカーション（視察や懇親会）の企画・運営内容、その他工夫点について、詳細なインタビュー調査を行った。各要素が国際 MICE 誘致・開催段階に与える影響を分析する。

第4章では、松江市、山形市、福井市のCBの2005年～2015年の事業報告書入手し、この内の主に誘致事業、調査・企画事業を精査し、各CBが取り組んでいる誘致、調査・企画事業の傾向や展開、戦略性の有無等を明らかにする。今後地方都市で国際 MICE を推進するための知見を得て、提言を行う。

第5章は、以上を総括し、地域が有する資源と照らしながら、誘致・開催の各段階で、より戦略的にCBの事業を行う要点を整理した。

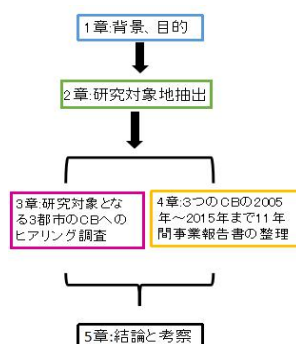


図 1.2 論文構成図

1-4-2 調査方法

まず、既往研究等文献調査により、地方都市の国際 MICE の開催状況を概観し、人口 10 万から 30 万までの松江市、福井市、山形市 3 都市の CB を研究対象として抽出した。

まだ EXPO ミーティング 2016 に集まる人口 10 万から 30 万人の地方都市の CB 担当者に対して簡易なインタビュー調査を行った(5 都市)。その結果、現在人口 10 万～30 万人の地方都市 MICE の取り組み現状がわかった。また、この結果に踏まえ、研究対象となる 3CB に半構造化インタビュー調査を行った。調査の結果、国際会議誘致と開催段階における地域資源活用の視点が違うことや、誘致と開催段階においてそれぞれの大きな影響を与える要素を明らかにした。

第 2 章 研究対象地を選択した経緯

2-1 目的

2 章では、筆者の研究対象地となる人口 10 万から 30 万人以内の都市のうちに、3 都市を取り上げた理由を明らかにする。

2-2 人口 10 万から 30 万までの都市に注目する理由

表 2-1 都市分類

分類	要件	対象地
特別区・ 政令指定都市	人口50万人以上の都市	東京都(大丸有地区・ 六本木地区・臨海副都心地区) 横浜市
中核市	人口30万人以上の都市	静岡市
特例市	人口30万人未満10万人以上の都市	つくば市
小都市	人口10万人未満の市町村	軽井沢町

「MICE 機能を通じた都市地域マネジメントの展開」より

「MICE 機能を通じた都市地域マネジメントの展開」において、松本(2016)は、大都市だけではなく地方都市においても MICE の誘致開催に積極的に取り組んでいることを明らかにしている。その論文では、地方都市は人口規模によって、中核市、特例市、小都市に分けられている(表 2-1)。

総務省のホームページに掲載されている特例市とは、日本の地方公共団体のうち「法定人口が 20 万人以上」の要件を満たし、地方自治法第 252 条の 26 の 3 第 1 項に定める政令による特別指定を受けた市のこと。かつてあった大都市制度の 1 つで、2015 年に制度としては廃止され、廃止時に特例市であった市のうち中核市等に移行しなかった市は施行時特例市と呼ばれ経過措置がとられている。現在、施行時特例市に入っている都市は大体人口 10 万から 30 万以内の 37 都市である。

中核市は政令指定都市が処理することができる事務のうち、都道府県がその区域にわたり一体的に処理することが中核市が処理することに比して効率的な事務を除き、中核市に対して移譲するものである。要件は人口 20 万人以上である。中核市制度は平成 7 年 4 月 1 日より施行され、平成 28 年 4 月 1 日現在の中核市の数は 47 都市である。

また、特例市は中核市が処理することができる事務のうち、都道府県がその区域にわたり一体的に処理することが特例市処理することに比して効率的な事務を除き、特例市に対して移譲するものである。特例市制度は平成 12 年 4 月 1 日から施行、平成 27 年 4 月 1 日に廃止。特例市制度が廃止の際、現に特例市である市(施行時特例市)が特例市としての事務を引き続き処理する。施行時特例市は、平成 32 年 3 月 31 日まで人口 20 万人未満であっても中核市の指定を受けることができる。平成 28 年 4 月 1 日現在施行時特例市の数は 37 市である。中核市と施行時特例市は大きな違いがないが、人口規模や処理できる事務に関して中核市の範囲のほうが広い。

表 2-2 現在指定都市・中核市・施行時特例市に属する市

	指定都市 (人口50万以上の市のうちから 政令で指定)	中核市 (人口20万以上の市の申出に基 づき政令で指定)	施行時特例市 (特例市制度の廃止(平成27年4 月1日施行)の際、現に特例市で ある市)
全国	20市	47市	37市
北海道	札幌(195)	旭川(33)、函館(26)	
東北	仙台(108)	いわき(34)、郡山(33)、秋田 (31)、青森(28)、盛岡(29)	山形(25)、八戸(23)
首都圏	横浜(372)、川崎(147)、さいたま (126)、千葉(97)、相模原(72)	船橋(62)、八王子(57)、宇都宮 (51)、横須賀(40)、柏(41)、高 崎(37)、前橋(33)、川越(35)、 越谷(33)	川口(57)、所沢(33)、水戸 (27)、平塚(25)、草加(24)、春 日部(23)、茅ヶ崎(23)、厚木 (22)、大和(23)、太田(21)、つく ば(22)、伊勢崎(20)、熊谷 (19)、小田原(19)、甲府(19)
北陸	新潟(81)	金沢(46)、富山(41)	長岡(27)、福井(26)、上越(19)
中部圏	名古屋(229)、浜松(79)、静岡 (70)	豊田(42)、岐阜(40)、長野 (37)、豊橋(37)、岡崎(38)	一宮(37)、春日井(30)、四日市 (31)、富士(24)、松本(24)、沼 津(19)
近畿圏	大阪(269)、神戸(153)、京都 (147)、堺(83)	姫路(53)、東大阪(50)、西宮 (48)、尼崎(45)、豊中(39)、和 歌山(36)、奈良(36)、高槻 (35)、大津(34)、枚方(40)	吹田(37)、明石(29)、茨木 (28)、八尾(26)、加古川(26)、 寝屋川(23)、宝塚(22)、岸和田 (19)
中国	広島(119)、岡山(71)	倉敷(47)、福山(46)、下関 (26)、呉(22)	松江(20)、鳥取(19)
四国		松山(51)、高松(42)、高知(33)	
九州	福岡(153)、北九州(96)、熊本 (74)	鹿児島(60)、大分(47)、長崎 (42)、宮崎(40)、久留米(30)、 佐世保(25)	佐賀(23)
沖縄		那覇(31)	

(出典：総務省地方公共団体の区分 / 中核市・施行時特例市
<http://www.soumu.go.jp/cyukaku/>)

表 2-3 国内モデル都市事例紹介

都市	人口(万)	テーマ	地域資源	概要	ポイント
山形市	25.42	温泉旅館を活用した国際会議の開催及びMICE参加者向けアプリ配布	温泉旅館	ホテルが少ないため、温泉旅館を国際会議参加者に宿泊施設として提供する。「やまがたMICEなび」アプリを開発し、無料で配布する	綿密な事前調整を踏まえた既存施設の有効活用 既存情報活用などにより低コストで情報発信媒体を開発
長岡市	28.27	アトラクションとして地元名産の日本酒の振る舞い酒を活用	日本酒	会議開催時に併催されたパーティで、市内酒蔵の日本酒を無料で提供する。	日本酒を活かしたMICEコンテンツを組成 費用対効果の高い継続可能な取り組み
岐阜市	41.31	市の有名観光資源である“鵜飼”をユニークプログラムとして利用	鵜飼	鵜飼見学をMICE参加者向けのユニークプログラムとして提供する。	鵜飼中止時のバックアップの用意 柔軟な対応を可能とする関係者との事前調整
松江市	19.43	キーパーソンがいなくても誘致できる催事をターゲットにした誘致戦略		地域内に国際学会本部等とのコネクションを有する人物・組織がいなくても、誘致できる催事にターゲットを絞り誘致活動を行っている。	都市の“身の丈”に合った明確な誘致戦略の策定 誘致対象催事を選定する独自データベースの構築 国内におけるネットワークの充実
高松市	41.94	地域の“盆栽”を活用した国際会議の誘致	盆栽	地域の特産であるノンサイをテーマにした国際会議「アジア太平洋盆栽水石大会」の誘致に成功した。	地域一体となった誘致活動の実施 地域一体となり大会を開催 大会中に盆栽に関連する数多くのイベントを実施
別府市	12.54	地域資源である“温泉”の活用と各種団体と幅広く連携した誘致活動を実施	温泉	地域最大の資源である温泉をアピールし、大分県や市内最大のMICE施設の運営者と連携し、いろいろ組織と協力する。	地域資源を最大限アピールした誘致活動を展開 近接して立地する県やMICE施設との高頻度な連携 地域の事業者と協力体制を構築

(「地域の特性を活かした MICE の推進にかかわる調査事業報告書 平成 28 年 3 月」より作成)

表 2-3 国内モデル都市事例紹介では、地域独特の地域資源を活用することで国際 MICE に取り組んでいる 6 つの都市が挙げられている。そのうち、山形市、長岡市、松江市、別府市が人口 10 万から 30 万以内の施行時特例市である。そのため、人口 10 万から 30 万以内の地方都市が地域ならではの地域資源を活用することで、積極的に国際 MICE の誘致・開催を行っているという仮説を立てた。本研究では、表 2-1 の都市分類に従い、特に特例市(現在の施行時特例市)を対象に事例を増やして行うことで、詳細に地域別に異なる特徴があるかどうかを把握したい。

2-3 調査対象都市の選定

JNTO¹の日本コンベンションガイドブックからコンベンションビューローを持っている49都市において、2010年以降の主な会議開催実績と向こう数年の主な会議開催予定をもとに、49都市における国際会議実績と予定開催表を作った。

JNTOの統計データによる国際コンベンション定義²により、国際会議は総参加者数50以上で、日本を含む三ヶ国以上、開催期間一日以上で、主催者は国際機関・国際団体(各国支部を含む)または国家機関・国内団体(民間団体以外)である。JNTO都市ガイドブックに掲載されているコンベンションビューローを有する49都市の2010年以降の主な会議開催実績と向こう数年の主な会議開催予定に、全ての会議がJNTO国際会議の要求に満たすのかははっきり判断できない。

本研究における自らの国際会議の基準を次のように定めた：

- ①会議名称に「世界」、「国際」、「アジア」、「日中韓」等文字が出現している会議を国際会議と認める。
 - ②名称には上記の文字が入っていないが、うち外国人参加者数が総参加者数の10%以上の会議を国際会議としている。
 - ③名称が英語で表記しており、外国人参加者数が10%以下の会議については、ウェブで詳細を調べてから、国際会議にあっているかを決める。
- その結果、会議名称に「世界」、「国際」、「アジア」、「日中韓」等文字を含める会議がほとんど外国人の割合が10%以上の国際会議であることがわかった。

¹JNTO: 日本政府観光局の略称。

²JNTOの国際会議の定義は「自治体、コンベンション推進機関、会議施設のための国際会議誘致ガイドブック」より

表 2-4 CB を有する都市 2010 年～2017 年までの主な国際会議開催回数

地域	人口/(万)	宿泊施設	総宿泊可能人数	2010～2017国際会議開催回数
箱根	1.349	193	18486	0
高山	8.89	67	7055	3
鶴岡	13.66	96	9703	3
上田	15.96			
釧路	18.12	34	4780	3
松江	19.43	57	9842	15
つくば	21.46	30	4674	13
伊勢志摩	23.22	304	31048	2
松本	24.3	115	4207	4
山形	25.42	57	7712	9
徳島	26.45	69	6042	0
福井	26.66	66	6042	10
下関	28.09	68	5049	1
盛岡	29.83	48	8006	2
秋田	32.36	52	7102	2
前橋	34.03	24	2396	1
旭川	34.71	35	6388	1
奈良	36.66	54		5
長野	38.15	184	11796	0
宮崎	40.06	50	8957	3
岐阜	41.31	42	5624	3
高松	41.94	63	8742	15
富山	42.2	460	30137	8
長崎	44.38	148	14396	6
金沢	46.24	84	13367	7
大分	47.41	84	16482	1
松山	51.72	83	13547	3
姫路	53.63	41	5479	2
鹿児島	60.58	55	10770	9
岡山	70.96	52	9249	7
静岡	71.62	99	8756	11
熊本	73.45	90	13417	2
浜松	80.09	83	14033	1
新潟	81.19	67	10803	16
千葉	96.17	52	7312	19
北九州	97.68	51	10447	16
仙台	104.6	138	14816	6
広島	117.4	140	19563	12
埼玉	122.2	30	3442	7
青森	138.3	66	7369	3
沖縄	142.3	356	81370	8
福岡	146.4	198	36773	7
神戸	154.4	69	20146	8
札幌	195.4	162	48014	6
名古屋	226.4	166	30460	9
京都	254.3	542		15
大阪	266.5			2
横浜	368.9	79	24156	13
東京	1350.7	1884	142065	11

(「日本コンベンション都市ガイド ー施設の概要と公的支援ー」より作成)

表 2-5 松江 CB2010 年～2017 年までの主な開催実績と今後開催の予定

開催時期	会議名	会場名	参加者数(外国人人数)	外国人比例
2017/7	The 29th International Conferenve on Defects in Semiconductors(ICDS-29)	くにびきメッセ	250(100)	40%
2016/7	北東アジア標準協力フォーラム	くにびきメッセ	150(80)	53.30%
2016/6	13th Russia /CIS/Baltic/Japan Symposium on Ferroelectricity(RCBJSF)and 8th International workshop on RelaxorFerroelectrics(IWRF)	くにびきメッセ	200(100)	50%
2016/5	14th International workshop on Slow Positron Beam Techniques and Applications(SLOPOS)	くにびきメッセ	120(65)	54.20%
2015/10	10th International symposium on Atomic Level Characterizations for New Materials and Devices '15	くにびきメッセ	250(50)	20%
2015/10	International Workshop on Cooling system for HTS Applications(IWC-HTS)	くにびきメッセ	150(50)	33.30%
2015/6	第56回日本臨床細胞学会総会・春季大会	くにびきメッセ他	3000	
2014/11	The 7th international symposium on surface science(ISSS-7)	くにびきメッセ	756(123)	16.30%
2014/9	9th International Conference on Photo-Excited Processes and Applications(ICPEPA)	くにびきメッセ	125(51)	40.80%
2013/10	International Conference on electric power Equipment-Switching thchnology(ICEPC)	くにびきメッセ	113(60)	53%
2013/8	The International Conference on Quantum Fluids and Solids(QFS2013)	くにびきメッセ	237(129)	54.40%
2013/8	日本高次脳機能障害学会学術総会	島根県民会館	1500	
2012/9	The 3rd Asia Conference on Nonlinear Analysis and Optimization(NAO-Asia)	くにびきメッセ	110(60)	54.50%
2012/8	第12回アジア・オセアニア性科学学会	くにびきメッセ	350(70)	20%
2012/2	日本がん看護学会学術集会	くにびきメッセ他	3800	
2011/8	8th Internatioanl school and Conference on Spintronics and Quantum Information Technology (SPINTECH VI)	くにびきメッセ	269(126)	46.80%
2011/5	International Conference on New Diamond and Nano Carbons 2011(NDNC2011)	くにびきメッセ	205(82)	40%
2010/11	第5回アジア高圧力会議	くにびきメッセ	115(46)	40%

(「日本コンベンション都市ガイド ―施設の概要と公的支援―」より作成)

表 2-6 つくば観光コンベンション協会 2010～2017 年までの主な開催実績と
今後の開催予定

開催時期	会議名	会場名	参加者数 (うち外国人 人数)	外国人比 例
2017/7	第15回世界音楽療法大会 (WCMT2017)	つくば国 際会議場	2500(500)	20%
2016/5	G7茨城・つくば科学技術 大臣会合	つくば国 際会議場	200(120)	60%
2016/5	第19回国際生物発光化学 発 生 シ ン ポ ジ ウ ム (ISBC2016)	つくば国 際会議場	400(200)	50%
2015/9	2015年 IAEVG 国際キャリ ア教育学会日本大会 (IAEVG2015)	つくば国 際会議場	517(182)	35.20%
2015/6	第6回日本プライマリ・ ケア連合学会学術大会	つくば国 際会議場	4700(20)	0.40%
2014/12	第10回国際高分子会議 (IPC2014)	つくば国 際会議場	685(118)	40.30%
2014/9	2014年国際固体素子・材 料 コ ン フ ァ レ ン ス (SSDM2014)	つくば国 際会議場	925(202)	21.80%
2014/9	精密計測及び精密検査の ためのレーザー計測シン ポジウム(LMPMI2014)	つくば国 際会議場	119(48)	40.30%
2013/9	第4回アジア太平洋合成 開口レーダ国際会議 (APSAR2013)	つくば国 際会議場	236(87)	36.90%
2013/8	アジアサイエンスキャン プ2013	つくば国 際会議場	226(193)	85.40%
2012/11	第21回パターン認識国際 会議(ICPR2012)	つくば国 際会議場	900(600)	66.70%
2012/9	第15回国際中性子捕捉療 法学会(ICNCT)	つくば国 際会議場	300(150)	50%
2012/9	日本特殊教育学会第50回 大会	つくば国 際会議場 、つくば カピオ	2000(30)	1.50%
2011/1	IPCC WGII AR5 First Lead Authors Meeting	つくば国 際会議場	240(231)	96.30%
2010/8	第21回 IUPAC 化学熱力学 国際会議(ICCT-2010)	つくば国 際会議場	665(233)	35%

(「日本コンベンション都市ガイド ―施設の概要と公的支援―」より作成)

表 2-7 福井観光 CB2012～2017 年までの主な開催実績と今後の開催予定

開催時期	会議名	会場名	参加者数 (外国人 数)	外国人比 例
2017/3	The 6 th International workshop on Far-Infrared Technologies	福井大学(敦賀キャンパス)	80(10)	13.75%
2016/11	第8回 日・台・韓3ヶ合同セミナー「トンネル火災 安全と管理」	福井大学(文京キャンパス)	150(30)	20%
2016/11	日中韓三大学交流機械・エネルギー工学シンポジウム	福井大学(文京キャンパス)	150(40)	26.70%
2016/11	第57回全国スポーツ推進委員協議会	サンドーム福井ほか	3000	
2016/10	第59回日弁連全国人権擁護大会・シンポジウム	福井市文化会館、福井市体育館、フェニックスプラザほか	2500	
2016/6	日本古生物学会 2016 年学会	福井県立大学、福井県立恐竜博物館	330(20)	6%
2015/10	第3回アジアジルコニウム会議 3rd Asian Zirconium Workshop	福井大学付属国際原子力研究所大会議室	57(30)	52.60%
2015/5	第12回マイクロビーム放射線応答国際ワークショップ	若狭湾エネルギー研究センター	154(52)	33.80%
2014/11	近畿高校総合文化祭	ハーモニーホールほか	6453	
2014/11	日本クリニカルパス学会学術会議	あわら温泉4旅館	2500	
2014/8	全国高等学校PTA連合会大会福井大会	サンドーム福井他県内各施設	9556	
2014/3	アジア恐竜国際シンポジウム	福井県立大学・恐竜博物館	136(36)	26.50%
2013/11	日本看護学会 地域看護学術会議	フェニックスプラザ	1050	
2013/10	全日本中学校長会研究協議会福井大会	フェニックスプラザ他	2062	
2013/9	SATOYAMAイニシアチブ国際パートナーシップ	福井県国際交流会館	132(54)	40.90%
2012/6	Snow engineering7	福井県国際交流会館	122(19)	15.60%
2012/3	The 4 th international workshop on Far-infrared technology 2012	福井大学	75(15)	20%
2012/3	アジア原子力フォーラム(FNCA)	福井県国際交流会館	50(22)	44%

(「日本コンベンション都市ガイド ―施設の概要と公的支援―」より作成)

表 2-8 山形 CB の主な開催実績と今後の開催予定

会議名	会場名	参加者数 (外国人数)	外国人比例
第8回国際アウトウ・シンポジウム	山形テルサ	200(100)	50%
9 th International Chrysophyte Symposium第9回国際黄金色藻シンポジウム ICS9	山形テルサ	60(40)	66.70%
ACOM2016/5 th Asian Conference on Mixing	天童温泉 ほほえみの宿 滝の湯	70(40)	57.10%
4 th EES Hands-on Seminar in YAMAGATA第4回内視鏡下耳科手術ハンズオンセミナー in 山形	山形医学交流会館	93(7)	8%
MAPLEX2015/多様な語彙理論に関するワークショップ	天童温泉 ほほえみの宿 滝の湯	52(36)	69.20%
第64回国際青年会議所アジア太平洋地域会議 山形大会 2014 JCI ASIA-PACIFIC CONFERENCE YAMAGATA, JAPAN JCI ASPAC	山形市総合スポーツセンター、山形国際交流プラザ(山形ビッグウイング)ほか	8129(1211)	14.90%
第3回国際応用情報学シンポジウム 3rd International symposium on Applied Informatics	かみのやま温泉仙溪園月岡ホテル	51(38)	74.50%
第5回サステナブルデザイン国際会議	東北藝術工科大学	400(7)	1.80%
国際ナノプランクトン学会第13回大会 /13th INTERNATIONAL NANNOPLANKTON ASSOCIATION CONFERENCE (INA13)	山形テルサ	120(62)	51.70%
第9回国際計算機情報科学会 9 th International Conference on Computer and Information Science	かみのやま温泉仙溪園月岡ホテル	190(103)	54.20%

(「日本コンベンション都市ガイド 一施設の概要と公的支援一」より作成)

表 2-5、表 2-6、表 2-7、表 2-8 は松江、つくば、福井、山形 4 つのコンベンションビューローの開催実績と今後の開催予定である。コンベンションビューローを有する人口 10 万～30 万までの地方中小都市の国際会議の開催実績と予定開催の統計表により、開催回数が大きくほかの都市と離れている上位四位の都市は松江市(15 回)、つくば市(13 回)、福井市(10 回)、山形市(9 回)である。

そして、この4つの都市は全部特例市(現在の施行時特例市)である。

表 2-9 2005 年～2014 年まで、松江、つくば、福井、山形 CB の国際会議実際の開催回数

CB名称	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	TOTAL
松江CB	1	2	3	8	2	2	3	9	10	8	48
つくばCB	60	64	82	80	74	69	46	53	51	66	645
福井観光CB	3	1	3	6	1	2	1	8	4	4	33
山形CB	1	1	0	2	1	2	0	1	0	1	9

(「国内都市別 国際会議開催件数 一覧表」より作成)

表 2-9 の集計について：

松江 CB と福井観光 CB は島根県と福井県全体の国際会議をマネジメントするため(コンベンションビューローに確認済み)、松江 CB の国際会議の開催回数は JNTO の「国内都市別 国際会議開催件数 一覧表」に掲載している松江市と浜田市の開催回数の合計で示した。福井 CB の国際会議の開催回数は福井県を構成する福井市、敦賀市、勝山市、あわら市、越前市、小浜市、鯖江市、永平寺町の合計で示した。そして、山形 CB が山形市を中心とする村山広域圏(7 市 7 町 山形市、寒河江市、上山市、天童市、東根市、村山市、尾花沢市、山辺町、中山町、河北町、西川町、朝日町、大江町、大石田町)において、国際会議や全国大会をはじめとするコンベンションを開催している。その国内都市別国際会議開催件数一覧表に掲載している山形県内の都市は山形市、米沢市、鶴岡市、上山市 4 つの都市だけなので、山形市と上山市の合計回数を山形 CB の国際会議開催回数としている。

表 2-9 のデータにより、つくば CB が開催する国際会議の数(645 回)はほかの 3 都市をはるかに上回っている。そして、つくば市においては、約 300 の 研究機関、18,000 人におよぶ研究者が最先端の研究活動を行っており、日本最大のサイエンスシティであるとともに、130 カ国以上からの多くの外国人が居住する国際色豊かな街でもある。つくばの中核施設「つくば国際会議場」では、最大 1,258 名収容の大ホール、2 つの中ホールや会議室と映像で結ぶことにより、

2,500名規模の会議の開催が可能である。交通方面において、都心からは、秋葉原から最短45分で結ぶ「つくばエクスプレス（TX）」、関東以外からは、神戸（又は札幌）～茨城空港間の飛行機が便利である。

そういった情報で、つくばが特異な状況であることを考慮し、研究対象から除外した。しかも、松本(2016)の研究では、つくば国際 MICE 都市としての特徴が明らかにされていることから、つくばを除き、松江、福井、山形を研究対象地とした。

第3章 国際 MICE の開催に影響する要因の分析

3-1 調査の目的と方法

3 章においては、3 都市(松江市、福井市、山形市)のコンベンションビューローを対象に、国際 MICE の開催に影響を与える要因を明らかにすることを目的として、EXP0 ミーティング 2016 でのプレ調査や第 2 章で抽出した 3 都市に対するインタビュー調査、ウェブサイトからの文献調査等を行い、集めた情報を表にまとめて、国際 MICE の開催に影響する様々な要因を比較、分析した。

3-2 インタビュー調査項目設計のためのプレ調査

ここでは、表 2-4 に掲載されている人口 10～30 万人の地方中小都市のうちに、抽出した 4 都市を除き、残り 8 都市のうち、ミーティング EXP02016 に出展した 5 都市(表 2-4 の赤い丸を付けている都市)を対象に、国際会議を誘致する際に重視する要素、CB の運営のシステム、エクスカーションの企画・運営、CB が抱える課題等について、簡易なプレ調査を行った。

3-2-1 5 都市の国際 MICE の取り組み現状

釧路市において、国際会議誘致する際に、最も重要なのは主催者が国際会議をここで開催する動機であると示された。釧路においては水産業や石炭業が強く、この地域の強みを活用し、水産関係、石炭関係の国際会議を誘致している。

釧路観光コンベンション協会の運営資金は①市役所からの補助、②観光協会の会員の賛助、③お土産、売店からの利益という 3 つの方面から出ている。

エクスカーションについては、2 パターンがある。一つは CB からの提案で、ただし、その実施中のバス交通の部分だけは外の人に頼むという形になっている。もう一つのパターンは企画から実施まで全てを旅行会社(JCB 等)に任せるという形である。そして、一般的にはパターン 2 のほうが多い。エクスカーションの内容についても、大体 2 種類に分かれている。一種類は学会会議の内

容に合わせたコンテンツを作る。たとえば、野鳥会議の場合は、会議テーマにフィットする探鳥活動がエクスカージョンに設定されることが多い。それ以外に、基本的にまったく会議内容に関係ない観光旅行を企画する。

釧路観光コンベンション協会が課題だと考えているのは釧路までアクセスしにくいということである。

伊勢志摩において、サミットをきっかけに、今年から三重大学と連携し、国際会議の誘致に取り組み始めた。国際会議誘致の形というところ、多くの場合は PCO¹ や旅行会社を通じて、主催者に提案してもらい、CB が直接に主催者にアプローチするという形である。

しかし、伊勢志摩が抱える最も大きな問題はホテルがないということである。多くのホテルの中身は旅館で、会議室、ホールなどがついていなく、洋室のホテル、ビジネスホテルもない。エクスカージョンについては、コンベンションビューローのパンフレットに掲載しているモデルコースを提案する純粋な観光旅行が多い。

松本においては、地域規模に合わせた MICE の誘致に注力している。松本観光コンベンション協会からは会場施設と宿泊施設が非常に重要であると指摘された。松本においては、4000 人から 5000 人規模の会議施設と宿泊施設を提供できる。また、国際会議を誘致する際に、県や市役所から提供された情報に基づいて、首都圏の学会などへの訪問活動、JNTO が主催した展示会への参加をしている。海外への展示会の参加はまだ始まっていない。それ以外に、地元大学(信州大学など)からの情報提供、東京のエージェント(旅行代理店など)も国際会議を誘致してくれる。

エクスカージョンの部分は松本観光コンベンション協会がやっている。まだ、県に存在するほかの観光をやっている組織からの協力も得ている。松本 CB の担当者によると、エクスカージョン部分は国際会議を誘致してくる力には至らないが。東京などの大都市での開催より地方都市で国際会議を開催する方が、コストが安く、また、大都市より地方都市の方が特色のある地域資源が豊富である。

徳島観光協会は観光と県全体の MICE 誘致開催を行っている。国際会議の誘致において、地元大学との連携と地場産業の存在という二点が重要である。1) 大

学との連携は国内・国際会議両方において役に立っている。歴史のある徳島大学の医学部、工学部、薬学部、歯学部が強く、徳島大学経由で国際会議を誘致してもらうケースがよくあるため、大学の研究者の力が大事だと考えられる。2) また、徳島において、日亜化学工業(LED企業、青色のLEDを開発した企業)、大塚製薬など大手企業があり、地場産業に関係する国際会議も多く開催されている。徳島で開催された国際会議は地域の強みとなる地域資源に繋がりのある分野の会議が多い。

徳島観光コンベンション協会の方によると、会場施設、宿泊施設、アクセスができてから、国内・国際会議の開催が可能であり、地方都市においては、大都市より安く開催でき、いろいろな体験もできるとのことであった。

徳島観光コンベンション協会が抱える課題は人数の多い学会の宿泊の対応が難しく、何千人規模の場合はほかの近くのホテルを借りなければならない。

盛岡観光コンベンション協会においては、会場が駅から近いのは誘致のメリットで、また、国際会議を誘致する際には、キーパーソンの力が大きいと言われた。学術的な会議が多く、地元大学の研究者とのネットワークが幅広く構築している。最近、首都圏の先生にも働きかけており、今後、そのネットワークを一層広げていく。また、国際誘致を促進していくため、2015年より助成金がかかなりの量になった。盛岡観光コンベンション協会の運営資金はメインは盛岡市からの補助で、それ以外は賛助会の会費もある。賛助会の会員は盛岡市近所の企業や観光関連の企業等である。

1PCO:国際会議や、学会、シンポジウム、展示会など MICE 開催の企画・運営(会議会場、同時通訳、宿泊施設の手配や講演者などのアテンドなど)を総合的にサポートする、国際会議・学会、展示会の総合運営サービス提供事業者は PCO と呼ばれ、その業務範囲は国際会議や学会の誘致段階の企画や申請他事務から実際の会議・学会運営・事務局代行など、多岐にわたる。 * (PCO:プロフェッショナルコングレスオーガナイザー / Professional Congress Organizer(MICEJAP のホームページより http://mice-japan.alexis.jp/mice_service_PCO.html)

エクスカーションはコンベンションビューローが企画し、旅行会社を実施してもらう。エクスカーションの内容は会議開催地の決定に大きな影響はないと考えられる。

3-2-2 インタビュー調査を行った CB が国際会議誘致において大事な役割を果たす要素に関する認識

5 都市の CB においては、宿泊施設のキャパシティが少ないことや交通アクセスが悪いこと等、様々な課題が存在している。1) 各コンベンションビューローの担当者によって、MICE 開催の必須前提条件は、会場施設、宿泊施設、アクセスの整備であることがわかった。そのため、ハード面に制限がある地方中小都市にでは、地域の規模に合わせた国際 MICE の誘致に注力すべきだと考える。

2) また、MICE の誘致段階と開催段階において、役に立つ要因が異なることがわかった。誘致段階ににおいて、地域の強みとなる地場産業や自然資源、地元大学・研究機関の強い分野等に関係する分野の国際 MICE の誘致が行いやすい。また、地元大学の研究者との人脈づくりが非常に大事だと考えられる。

3) MICE の誘致段階と開催段階で地域資源活用の視点が異なることを把握した。

3-3 3CB の国際 MICE の誘致・開催現状の把握と国際 MICE の誘致に大きな影響を与える要因の分析

第 2 章で抽出した 3 都市において、国際 MICE の誘致に大きな影響を与える要因を明らかにするため、プレ調査で得られた 5 都市の CB の国際会議誘致段階に影響を与える要因に関する認識を参考に、3 都市の CB に対して、1. 都市のハード面の整備状況、2. ソフト面の整備状況 (1) CB が行っている業務、(2) MICE の誘致に大きな役割を果たしている地場産業・地域組織、運営システム等、(3) エクスカーション (視察や懇親会) の企画・運営内容等について、半構造化インタビ

ュー調査を行った。

3-3-1 3 都市のハード面の整備状況

3 都市への現地調査やウェブサイトでの文献調査を通じて、3 都市のコンベンション会場、宿泊施設、交通アクセスの整備状況を把握した。

会場施設

松江

くにびきメッセ（島根県立産業交流会館）



（写真はグーグルから）

くにびきメッセ（島根県立産業交流会館）、島根県のコンベンション施設の中核的拠点である。展示場・会議室の両方を備えた山陰最大規模を誇るコンベンション施設である。大展示場全面で最大収容人数は 5000 人シアター形式で、多目的ホールは最大収容人数はスクール形式で 350 人、シアター形式で 650 人である。国際会議場は半円形会議場で、シアター形式で最大収容人数は 510 人で、同時通訳機が四か国語対応可能である。

JR 松江駅より徒歩 7 分

出典：くにびきメッセホームページより <http://www.kunibikimesse.jp/8.html>

くにびきメッセ島根県立産業交流会館のパンフレットより

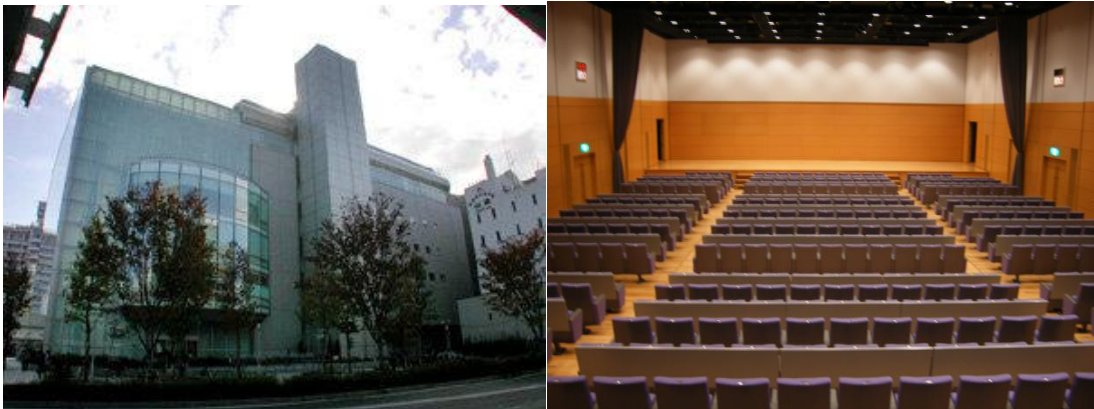
島根県民会館



(写真はグーグルから)

島根県民会館は松江中心部に位置する施設で、固定席ホール(大ホール、中ホール)のほかに大小の会議室を兼ね備えている。JR 松江駅より徒歩 20 分
バス:松江しんじ湖温泉行 10 分「県民会館前」下車 キャパシティ 1804 人
出典:島根県民会館ホームページより <http://www.cul-shimane.jp/hall/>

松江テルサ



(左の写真はグーグルから、右の写真は松江テルサのホームページからテルサホール(590 m²))

松江テルサは、JR 松江駅前にあり、交通の利便性が抜群のところにある。施設は、平土間でもシアター形式でも使用できるテルサホールや、大小の会議室を備えている。

JR 松江駅前 キャパシティ 580 人

出典:松江テルサホームページより

<http://www.sanbg.com/terrsa/floor/hall.html>

福井

フェニックス・プラザ



(福井調査の際に筆者撮影)

福井市フェニックス・プラザは福井県最大規模のコンベンション施設である。大ホール(最大 2000 名収容)・小ホール(最大 500 名収容)・会議室を保有する施設で、大ホールはコンサートやパーティ、会議室は研修会や会議等様々な用途に合わせ利用できる。

電車で JR 福井駅前より約 10 分、えちぜん鉄道三国芦原線田原町駅下車
バスで福井駅前より約 10 分、コミュニティバス『すまいる』「田原町駅」下車

出典:福井コンベンションガイド、フェニックスプラザホームページより

<http://www2.fctv.ne.jp/~phoenix/index.html>

福井県県民ホール



(左の写真はグーグルから 右の写真は福井県県民ホールのホームページから)

福井県県民ホールはアオッサの8階にある多目的ホール(設置者:福井県)で、キャパシティは最大 570(シアター) コンベンションスクールの形式、学会、会議、シンポジウム、セミナーなどに使われる。

徒歩で JR 福井駅より 1 分

出典:福井県県民ホールホームページ

<http://kenminhall-fukui.jp/aboutstyle/>

福井県国際交流会館



(写真はグーグル画像から、右手は多目的ホール)

福井県の国際交流活動の拠点として、多くの国際交流事業を行っている。多目的ホールの収容人数は最大 300 人で、講演会、シンポジウム、国際会議、音楽会等多目的に利用できる。電動可動式座席を収納することによりフラットなフロアでレセプション、展示会場としても利用できる。各種音響映像装置および 5 か国語対応の同時通訳設備もある。

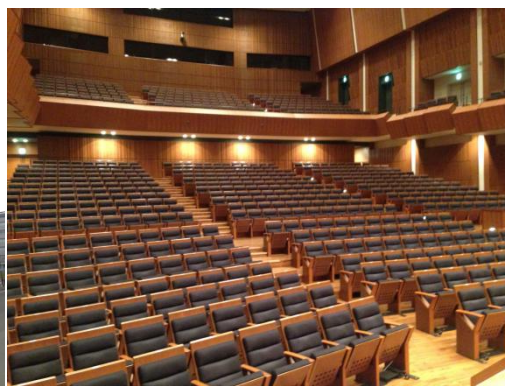
JR 福井駅より徒歩 15 分/自動車で福井 IC より 20 分

出典:福井コンベンションガイド、福井県国際交流会館ホームページより

<https://www.f-i-a.or.jp/ja/plaza/facilitys/rental/blf/multipurposehall/>

山形

山形テルサ



(山形調査の際に筆者撮影)

山形テルサは山形市内もっとも使われている施設である。交通利便性の高いJR山形駅西口地区に立地する。テルサホールの最大収容人数が806名で、クラシック演奏会やコーラス発表などに適した本格的なコンサートホールである。3階にあるアプローズは昇降舞台、移動観覧席、プロジェクターなどを備え、大規模な研修や講演会に対応できる多目的施設で、最大収容人数は400名である。

JR山形駅西口より徒歩3分

出典:山形テルサの紹介パンフレット、山形テルサホームページより

<http://www.yamagataterrsa.or.jp/>

山形ビッグウイング (山形国際交流プラザ)



(山形へ調査する際に筆者撮影)

山形ビッグウイングは日本東北地方の国際化の役割の一翼を担っている。学会・大会・展示会・イベントすべてのニーズに応える複合コンベンション施設である。最大収容人数は 3500 人で、2 階の 400 席のところに同時通訳の設備が付き、五か国語対応できる。

JR 山形駅より少し離れているが、バス『県立中央病院行き』で 20 分、タクシーで約 15 分。

出典：山形コンベンション施設ガイド、山形ビックウイングごーむページより

<http://www.convention.or.jp/bigwing/>

宿泊施設

表 3-1 3 都市の宿泊施設分類

宿泊施設分類	松江	福井	山形
ホテル	1サンラボーむらくも	1ホテルフジタ 福井	1山形における宿泊施設の ホテル
	2レインボープラザ	2ユアーズホテルフクイ	2山形グランドホテル
	3ホテルルートイン松江	3福井パレスホテル	3ホテルキャッスル
	4東横イン松江駅前	4かんぽの宿 福井	4ホテルメトロポリタン 山形
	5ドーミーインEXPRESS 松江	5ホテルリバービューアケ ボノ	5山形七日町ワシントン ホテル
	6松江エクセルホテル東 急	6アパホテル福井片町	6山形駅西口ワシントン ホテル
	7松江アーバンホテル	7東横イン福井駅前	7山形国際ホテル
	8ユニバーサルホテル	8デサン イン福井	8ヒルズサンピア山形
	9ユニバーサルホテル別 館	9ホテルルートイン 福井 駅前	9ソール イン ホテル ズ
	10松江駅前ユニバーサ ルホテル	10ホテルルートイン 福 井太和田	10ホテルNEW最上屋
	11松江プラザホテル本 館	11ホテルエコノ 福井 駅 前	11ホテルイーストワン 山形
	12松江プラザホテル別 館	12エースイン福井	12コンフォートホテル 山形
		13福井フェニックスホ テル	13ホテルニューマーブ ル
		14ターミナルホテルフ クイ	14ホテルさくらんぼ
		15ホテルフクイキャッ スル	15ホテルキャピタルイ ン山形
		16福井パレスイン	16ホテルリモージュ
		17福井アカデミアホテ ル	17ホテル・アルファ ワン山形
		18福井プラザホテル	18ホテルグリーンター ホク
		19アネックスホテル 福 井	19ホテルステイイン七 日町
		20タウンホテル福井	20ホテルルートイン山 形駅前
		21福井セントラルホテ ル	21リッチモンドホテル 山形駅前
		22ホテルそのさだ	22東横イン山形駅西口 山形駅前
温泉ホテル	1なにわー水		23スーパーホテル山形 駅西口天然温泉
	2夕景湖畔すいてんかく		1大野目温泉 旅館安部
	3ホテル一畑		2ホテル樹林
	4ホテル白鳥		3ホテルルーセントタカ ミヤ
	5松江ニューあーまんホ テル		4たまみや瑠璃倶楽リゾ ート
	6皆美館		5ホテル松金屋アネック ス
	7大橋館		6太平ホテル
			7ル・ベール蔵王
			8ホテルオークヒル
			9ZAOセンタープラザ
			10蔵王温泉みはらしの 宿 故郷
旅館	1野津旅館	1ホテル割烹石丸	11蔵王アストリアホテ ル
		2白之出旅館	
		3宝永旅館	
		4リバーサイドすづや	
		5小玉旅館	
		6越前赤坂	

(松江コンベンションビューローパンフレット、福井コンベンション施設・宿泊
ガイド、山形コンベンション施設ガイドより作成)

表 3-2 3 都市交通アクセス

交通機関	松江	福井	山形
飛行機	<日本航空>	羽田空港—小松空港 1時間5分 12便/日	国内線 羽田空港—山形空港 1時間
	東京—出雲 約1時間 20分 5往復/日	成田空港—小松空港 1時間15分 2便/日	名古屋(小牧)空港—山形空港 1時間5分
	大阪—出雲 約50分 5往復/日	札幌(新千歳)—小松空港 1時間45分 1便/日	大阪(伊丹空港)—山形空港 1時間10分
	福岡—出雲 約1時間 15分 2往復/日	仙台空港—小松空港 1時間5分 2便/日	羽田空港—庄内空港 1時間
	<フジドリームエアラインズ>	福岡空港—小松空港 1時間15分 4便/日	国際線
	名古屋—米子 約1時間 20分 1往復/日	那覇空港—小松空港 2時間10分 2便/日	バンコク—仙台空港
	<全日空>	小松空港—JR福井駅前 約1時間 10便/日	グアム—仙台空港
	東京—米子 約1時間 30分 8往復/週		ソウル—仙台空港
	<アジアナ航空>		台北—仙台空港
	ソウル—米子 約1時間 30分 3往復/週		ホノルル—仙台空港
JR			山形空港からJR山形駅まで (バス) 高速道路利用35分
	大阪—松江 約3時間 40分	①東京駅・名古屋駅から 東海道新幹線「ひかり」を利用し、米原駅で 北陸本線「しらさぎ」に乗り換え	東京駅—山形駅(山形新幹線2時間53分)
	東京—松江 約6時間		仙台駅—山形駅(仙山線快速最短67分)
	福岡—松江 約4時間 30分	②大阪から	
		特急「サンダーバード」を利用	
		東京駅—福井駅 3時間30分	
		名古屋駅—福井駅 2時間10分	
高速バス		大阪駅—福井駅 1時間55分	
	大阪—松江 約4時間 40分	JR東京駅—福井駅東口 3時間20分	
	広島—松江 約3時間	JR名古屋駅—福井駅前 2時間50分	
	岡山—松江 約3時間	阪急梅田駅(大阪)—福井駅東口 3時間30分	
	福岡—松江 約10時間 20分		
	東京—松江 約11時間 15分		
	京都—松江 約5時間		
	神戸—松江 約4時間 20分		

(松江、山形、福井 CB のホームページ情報より作成した)

会場施設について、CB の担当者により、地方都市で開催する国際会議の規模はほぼ 500 人以内であると言われた。以上の調査情報を踏まえて、福井と山形の会場施設のキャパシティや設備などには大きな差がないが、松江 CB が運営し

ている国際会議に頻繁に使われる会場施設「くにびきメッセ」は福井、山形の会場施設より規模が大きく、国際会議必要な設備が整っているため、国際会議の開催に使われやすいと指摘された。会場施設の規模や会場設備等が国際会議の開催に一定的な影響を与えることが推察されたが、受容人数 500 人くらいで、国際会議開催できる設備を備えた会場施設は 3 都市がすべて持っているため、会場施設は 3 都市の国際会議の誘致に大きな影響は与えていないことがわかった。

表 3-1 により、3 都市では宿泊施設の中に、ビジネスホテルの数が多い。3CB へのインタビュー調査によれば、一部のホテルに 100 人くらいの会議を行うことが可能で、バンケットや懇親会等がホテルで行うことも多いと言われた。また、地方都市において、高級ホテルが少ないため、国際学会のトップクラスの方の宿泊問題が地方都市の MICE 誘致・開催の課題の一つとして指摘された。

3 都市のうち、山形 CB が温泉ホテルでの国際会議の開催を売りにし、国際会議の誘致に取り組んでいる。しかし、山形 CB の担当者は温泉ホテルが国際会議の誘致に大きな影響を与えるわけがなく、国際会議開催段階のおもてなしや地域魅力発信に繋がると考えられる。また、国際会議開催時に、温泉に入れない外国人の参加者がいることや温泉ホテルの和室に慣れない参加者がいるという課題もある。

交通アクセス方面について、地方都市は大体飛行機で直達することができないため、一般的に空港で乗り換え、開催地近くの駅までバスで一時間くらい移動する。3 都市のうち、新幹線で行く場合、最も便利な都市は山形だが、新幹線に乗車する前に成田空港から上野駅までのルートがわかりづらいとも言われる。

表 3-3 3CB が抱える課題

地域	松江	福井	山形
コンベンション ビューローが抱 える課題	①海外の国際主催 者とのネットワー クの構築が難しい	①海・陸・空3つの方面 において、交通アクセス が難しい	①アクセスのエアの 部分が弱い
	②交通アクセスが 不便	②国際会議ができる都市 型のホテルがない。	②サイン表示の直し
		③コンベンション専用ホ テルセンターがない。	

(3CB へのインタビュー調査内容により作成)

松江 CB により、現在最も問題だと考えられるのは海外の国際会議の主催者とのネットワークの構築である。松江コンベンションビューローが海外に向いての国際会議の誘致を取り組み始めたが、まだ大きな効果が出て来ていない。また、交通アクセスが不便であることも言われた。

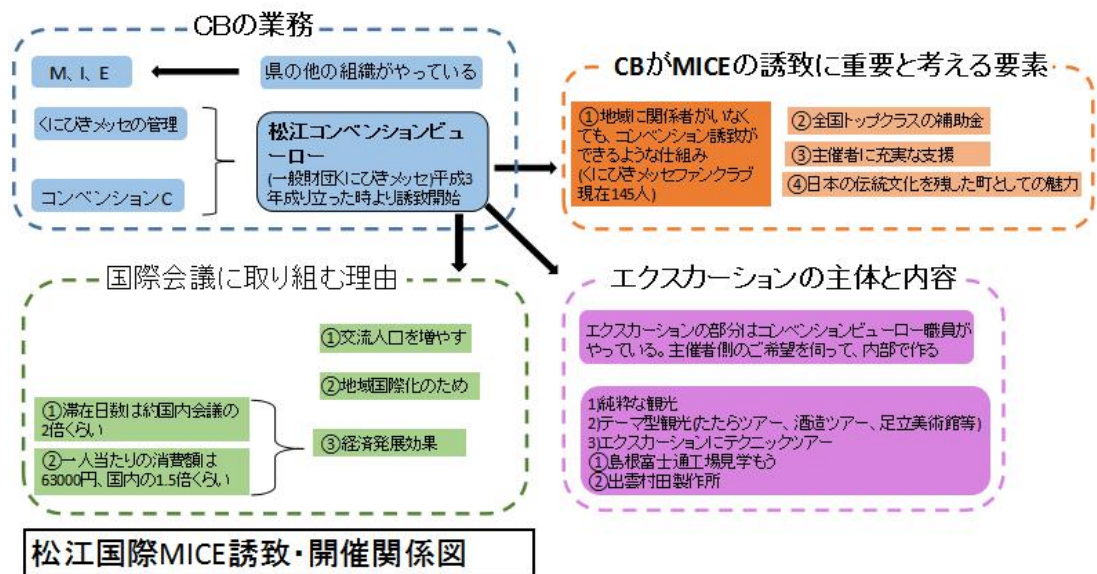
福井ではエアや陸や海において直接にアクセス出来ないのは問題である。また、本格的な国際会議が開催できる都市型のホテルがなく、レベルの高いコンベンション専用のホームセンターも存在しない。福井においては、コンベンション会場、宿泊施設、交通アクセスで構成しているハード面がまだ弱いとも言える。

山形では、交通アクセスのエアの部分がまだ弱い。また、サイン関係の部分も弱く、山形駅からコンベンション会場まで、サイン表示がわかりにくく、改善される必要があると指摘された。

その結果、3都市において、国際 MICE 誘致の前提条件となる会場施設、宿泊施設、交通アクセスについて、それほど大きな差がないことがわかった。交通アクセス、会場施設・宿泊・飲食施設等に優れる大都市と違い、ハード面の整備問題は中小都市の共通問題なので、しかもなかなか改善できないところである。

3-3-2 3都市のソフト面の整備状況

3CB へのインタビュー調査で、3CB が国際会議を誘致、開催する際に、1)CB が行っている業務、2)MICE の誘致に大きな役割を果たしている地場産業・地域組織、運営システム等、3)エクスカージョン(視察や懇親会)の企画・運営内容、4)ほかの工夫点を把握した。そういった情報をもとに、3CB の国際会議誘致・開催関係図を作り、3CB の国際会議誘致・開催への取り組みを分析する。

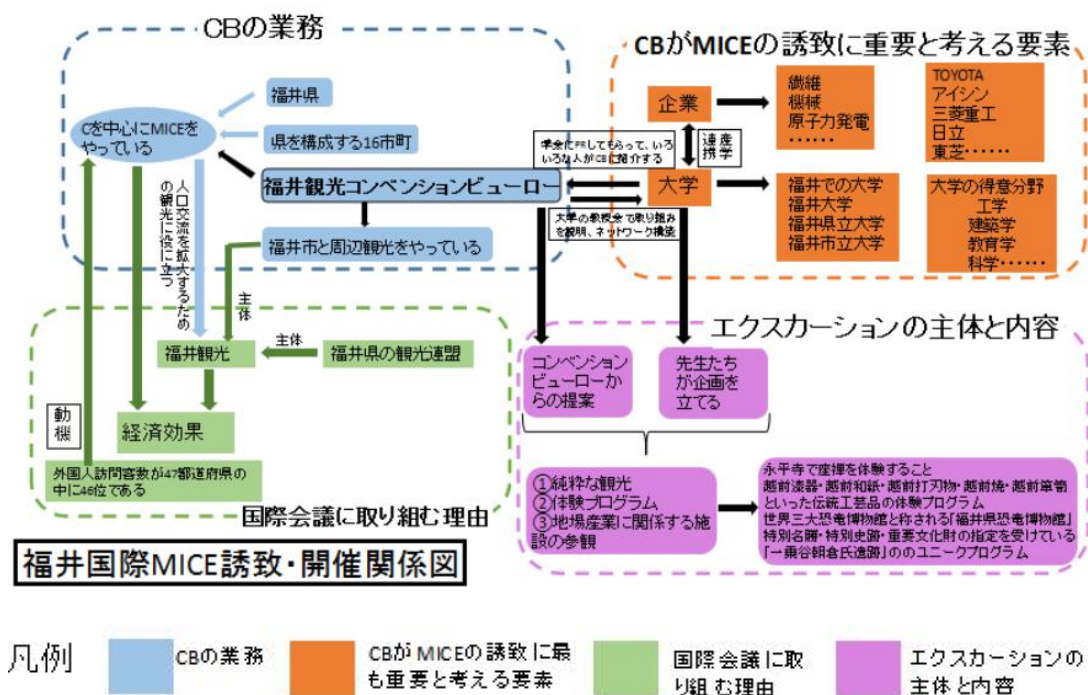


凡例

- CBの業務
- CBがMICEの誘致に最も重要と考える要素
- CBがMICEの誘致に重要と考える要素
- 国際会議に取り組む理由
- エクスカーションの主体と内容

図 3-1 松江の国際 MICE 誘致・開催関係図

(松江コンベンションビューローへのインタビュー調査により作成)



凡例

- CBの業務
- CBがMICEの誘致に最も重要と考える要素
- 国際会議に取り組む理由
- エクスカーションの主体と内容

図 3-2 福井の国際 MICE 誘致・開催関係図

(福井観光コンベンションビューローへのインタビュー調査により作成)

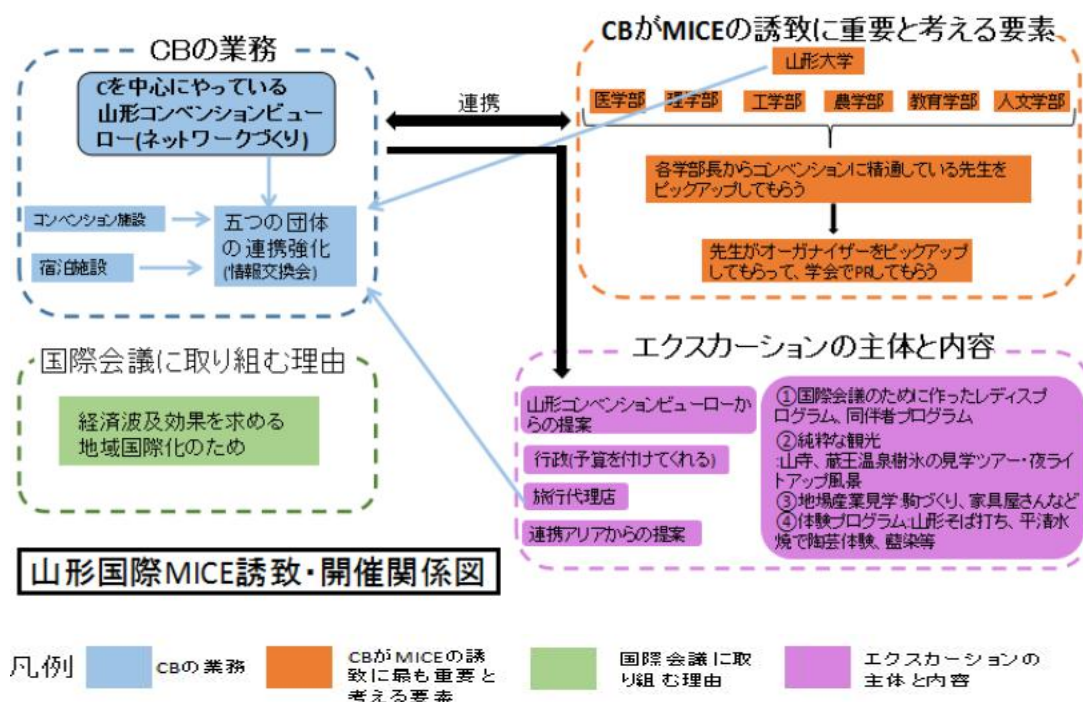


図 3-3 山形の国際 MICE 誘致・開催関係図

(山形コンベンションビューローへのインタビュー調査より作成)

①各 CB の構成や行っている業務と運営仕組みの説明

ここでは、3CB へのインタビュー調査をもとに、3CB の構成や行う業務、運営仕組み等に関する表を作成した。この表 3-4 をもとに、3CB の構成と行う業務と運営仕組みを詳しく説明する。

松江コンベンションビューローが一般財団法人くにびきメッセが平成 3 年に立ち上げ、その時から MICE の誘致をはじめた。そして、松江 CB は MICE の中のコンベンションだけを取り扱う。MICE の M、I、E の部分に関する業務は県のほかの組織が行う。また、業務として、くにびきメッセという島根県におけるメインとなるコンベンション会場施設の運営管理もしている。

CB の運営資金が基本的にくにびきメッセの運営から出ているので、県や市からの補助が一切受けていない。松江 CB の従業員構成について、事務局長 1 人、東京営業駐在 1 人、市からの出向 1 人、他の組織から期間限定のスタッフ 1 人

表 3-4 3CB の構成と行う業務と運営仕組み

地域	松江	福井	山形
CBの有無	松江コンベンションビューロー(一般財団法人くくびきメッセ)	福井観光コンベンションビューロー(公益財団法人)	福井観光コンベンションビューロー(公益財団法人)
CBの役割	①コンベンションの誘致・開催のみに取り組む	①県と県の16市町が一体的に学術コンベンションを中心に、MICEの誘致・開催に取り組む	①コンベンションを中心にMICEの誘致・開催に取り組む
	②くくびきメッセメインな会議施設の運営管理	②福井市と周辺地区の観光もやっている	
CB従業員構成	事務局長	副理事長と事務局長は市役所からの派遣	山形CBの職員が専従している、今までの経緯を全部把握して、うまくコーディネートできる。
	東京営業駐在一人	市役所から計4名	
	市からの出向一人	工商会議所から1名	
	一人は別のところから(期間限定)	JTBから1名出向	
CB運営資金	くくびきメッセの運営管理から	①県と市からの補助金	村山広域圏の7市7町から
		②賛助委員会からの寄付金	
CB受けている行政からの補助	人材	人材と資金	資金
国際会議分野	具体的な分野がないが、県外の大学の先生の経由で学術会議が最も多い。特に理学、工学系の学術会議が多く、それは補助金の高額に 関係ある	大学や学会に関係する学術分野が最も多く、教育分野も強い。福井県の繊維、機械、原子力発電等産業に関係ある会議	山形大学の各学部に関連ある学会の学術会議が多い。業界団体(製造関係、流通関係の団体組織)

(3CB へのインタビュー調査の内容により作成)

で構成している。松江 CB は市役所から人材の派遣の援助を受けている。

国際会議の分野について、具体的な会議分野はないが、県外研究者経由の学術会議が多い。また、松江市の補助金が多いため、資金面に余裕を持っていない理学系や工学系の国際会議がよく開催される。

福井観光 CB は MICE の誘致・開催と観光両方を同時に行っている。MICE の誘致・開催業務については、福井県と県を構成している 16 市町と共に、コンベンションを中心に、MICE の誘致・開催に取り組んでいる。それ以外は、福井市とその周辺地域の観光にもかかわっている。

福井観光 CB の運営資金は県と市からの補助と賛助委員会からの寄付金である。人員構成については、副理事長と事務局長は市役所からの派遣で、市役所

からの派遣は計4名、工商会議所から1名、JTBから出向1名、プロパー3名での構成である。福井観光CBは資金と人材両方に行政からの支援を受けている。

国際会議の分野について、福井では大学や学会に関係する分野の国際会議の開催が最も多い。また、福井では、繊維、機械、電子力発電等産業に関係する会議もよく開催される。

山形CBはMICEの中のCを中心にMICEの誘致・開催を行っている。山形CBの運営資金は福井観光CBと同じようにメインは県と市からの補助で、賛助委員会からも一部出している。従業員については、山形CBの方は全員プロパーで、全国のCBの中にも、マンパワーが非常に強いと指摘された。山形CBは資金だけ行政からの支援を受けている。山形の会議分野について、山形大学の各学部に関係ある学会の学術会議が最も多く、それ以外、業界団体に関する会議も開催されている。

3CBのMICEに取り組んでいる分野は大都市のようにMICEの中のコンベンションに偏り、しかも最もアプローチしやすい学術を中心とする国際会議に集中する傾向が見えてきた。

②MICEの誘致に大きな役割を果たしている地域産業、地域組織、地域運営システム等

ここでは、3CBへのインタビュー調査から得られた国際会議の誘致に影響する要因を表3-5にまとめた。この表を参考に、3CBが学術会議を中心とする国際会議を誘致する際に、3CBが考える重要な要素を分析する。

松江では、地元の島根大学に強みを持っている学部が少なく、国際会議がよく開催される学会に入っている地元大学研究者も少ないため、地域にキーパーソンがいなくても、コンベンション誘致ができるような仕組みを作った。過去に松江で開催した国際会議、全国大会・学会に参加した研究者と直接にアプローチし、そういった研究者の中に、松江に愛着を持っている東京や大阪など大都市の大学の研究者を集め、くにびきメッセファンクラブ¹を作った。自らの

表 3-5 3CB が考える国際会議の誘致に重要な要素

地域	松江	福井	山形
誘致において重要な要素	①島根県外の多くの大学の先生(特に東京、大阪)にネットワークを構築し、松江に熱意を持っている先生がくまびきメッセファンクラブに入っている	①福井地元大学の先生とのネットワークの構築、大学の得意分野に関係する学会の誘致	①山形大学医学部、理学部、工学部、農学部、教育学部、人文学部六つの学部との連携
	②全国トップクラスの補助金	②福井に繊維、機械、電子力発電等産業が多く、産業に関する各業界会議が数多く開催する。	②立候補から開催終了まで充実なサポート、ホスピタリティ
	③主催者に対する充実な支援	③地元大学と産業との産学連携が重要である。	
	④日本の伝統文化を残した町としての魅力		
会議開催補助金	県と市から、全国でもトップクラス、国内国際会議金額同じ	県と市から、誘致のポイントにはならない	県と市から、誘致のポイントにならないが、具体的な金額というと、県から年間200万、市から年間100万。普通助成金の200名以上で、国際会議の場合は50名以上で取り扱う

(3CB へのインタビュー調査の内容により作成)

方法で、キーパーソンとのネットワークを構築した。また、ファンクラブに所属する研究者との関係を維持するため、年に一回ずつ東京と大阪で会合を行い、各学会に関する情報を集めて、首都圏や大阪等大都市に本部を持つ学会に誘致訪問を行う。これは松江 CB が考える国際会議の誘致に最も大事な要素である。また、国内会議や国際会議に対して、全国トップクラスの補助金を提供している。それ以外に、松江 CB の担当者は国際会議の誘致には、主催者に充実な支援や日本の伝統文化を残した松江の町の魅力も大事だと述べた。

一方、福井では、福井観光 CB の担当者が大学の教授会で国際会議誘致支援制度やインセンティブを説明し、積極的に人脈づくりに取り組む。強い学部を持っている福井県内大学の研究者とのネットワークの構築ができ、大学の研究者が学会で PR してもらう。また、福井においては、繊維や機械や原子力発電など地場産業が多く存在するため、地場産業に関係する国際会議も数多く開催されている。

1 くまびきメッセファンクラブ:松江コンベンションビューローが松江に愛着を持っている先生がこのグループに招待し、年一回東京と大阪において、先生方と国際会議・国内会議の情報を交換する。東京、大阪の大学の先生が約 145 人、企業関係者も少数入っている。

山形では、地元大学に強みを持っている六つの学部の研究者とのネットワー

クができており、大学の研究者が入っている学会に PR してもらう。また、地元大学の研究者との関係を維持するため、CB が毎年会合を行ったり、大学の各学部の説明会に出たりすることで、様々な情報を把握し、東京や仙台などの学会本部に誘致訪問を行う。

学術会議を中心とする国際会議の誘致形式は 3 つのルートに分けられている。1) ネットワークができたキーパーソンが学会に PR してもらい、当該都市の開催を立候補する。2) キーパーソンから様々な学会やコンベンションに関する情報を得て、CB が東京や大阪などの大都市に立地する学会に誘致訪問を行う。3) 研究者の知り合いの中に、大学や研究機関等に所属する研究者が多いため、キーパーソンからまた別の研究者を紹介してもらい、キーパーソンとのネットワークや国際会議開催に関する情報が一層広がるようになる。

また、地域に強い分野を持っている大学や研究機関がない場合、外の研究者との人脈づくりを積極的に行う仕組みを工夫するのもあり得る。学術会議を中心とする国際会議の誘致に大きな影響を与える要因はキーパーソンとの人脈づくりだと考える。補助金や地域の魅力、充実な支援などがキーパーソンや CB が候補主催者に PR する際に欠かせないネタであるが、国際会議の誘致に決定的な要因ではない。

③ エクスカーションの企画・運営内容

3CB へのインタビュー調査をもとに、3 都市のエクスカーションの部分を表 3-6 にまとめた。この表を見ながら、3 都市のエクスカーション部分にかかわる各主体とエクスカーションのコンテンツについて説明する。

松江 CB においては、CB の職員が主催者側の希望を聞き、エクスカーションの企画をたて、内部で作っている。また、コンテンツとしては、純粋な観光や製鉄ツアー等テーマ型の観光、また、近年、工場見学ツアーが発展している動きが見えてきている。

福井観光 CB においては、エクスカーション部分については、CB からの提案と大学の研究者が立てる企画がメインで、手作りの感じが強い。コンテンツとしては、福井の定番となる観光地の参観や和文化を体験できるプログラム、
表 3-6 エクスカーション部分にかかわる主体とコンテンツの構成

地域	松江	福井	山形
エクスカーショ ンに係る主体	コンベンションビューローの職員が開催者側のご希望を伺って、企画を立てる	①コンベンションビューローからの提案 ②先生たちが自前で企画を立てる	①山形コンベンションビューローからの提案 ②行政(予算を付けてくれる) ③旅行代理店 ④連携エリアからの提案
エクスカーショ ンコンテンツ	① 普通 の 観 光 ツ ア ー ②テクニクツアーが発展している。	①永平寺での座禅体験、越前漆器・越前和紙・越前打刃物・越前筆筥といった伝統工芸品の体験プログラム ②世界三大恐竜博物館の一である「福井県立恐竜博物館」 ③特別名勝・特別史跡・重要文化財の指定を受けている「一乗谷朝倉氏遺跡」のユニークプログラム	①レディスプログラム・同伴者プログラム ②観光:山寺、蔵王温泉樹氷の見学ツアー、夜ライトアップ風景 ③地場産業:駒づくり、家具屋さん見学 ④体験プログラム:山形そば打ち、平清水焼で陶芸体験、藍染.....

(3CB へのインタビュー調査の内容により作成)

場産業に関係する施設の見学が多い。

山形 CB においては、エクスカーションの部分に様々な主体が連携している。基本的に山形 CB からの提案に、行政から補助を受け、旅行代理店に企画を作成、実施してもらう。また、連携エリア(主に観光地)からも提案してもらう。基本的に、そういった4つの主体がエクスカーション部分にかかわっている。また、コンテンツとしては、純粋な観光や地場産業見学や体験プログラム等がよく行われている。

④国際会議に取り組む理由

国際会議に取り組む大きな理由は、地方都市は現在人口減少、経済発展停滞などの問題に悩んでいることである。そういった問題を解決するため、国際 MICE の誘致・開催がその手段の一つになれると考えられる。

福井市が国際 MICE の誘致を行うきっかけは福井県の外国人訪問客数が 47 都道府県の中に 46 位であるため、国際 MICE の開催を通じて、多くの外国人に知ってもらうためである。

山形市も同じように、地域経済に波及効果を及ぼし、山形や日本の文化を外

国人に知ってもらうためである。

松江市は同じく地域人口交流を増やし、地域の国際化を促進し、経済発展など様々な効果を求めている。そして、松江 CB の調査によると、国際会議の参加者の平均滞在日数は国内会議の約 2 倍で、一人あたりの消費額は国内会議の約 1.5 倍であり、経済波及効果が国内会議より一層高く、経済効果に対する統計の精度も高いとのことであった。

3-4 結論：国際会議誘・致開催段階において、大きな影響を与える要因の分析

以上の調査より、国際会議を誘致するにあたって、誘致段階、開催段階において、大きな影響を与える要因がそれぞれ異なることが明らかになった。

国際会議誘致する前に、地方中小都市が最も重視するのは会場施設、宿泊施設、交通アクセスというハード面の整備である。それが国際会議誘致・開催の前提条件である。

地方都市において、MICE のうち学術会議を中心とする国際会議を重視していることが確認された。国際会議の「誘致段階」においては、地域内大学や研究機関等の研究者のキーパーソンとの人脈構築が非常に重要である。また、地域に特徴的な地場産業や自然資源などが国際会議のテーマの関連した時に、このような国際会議を当該地域へ誘致しやすいことがわかった。

最初に筆者がエクスカージョン部分に活用された地域の食資源や観光資源、伝統文化などが国際会議の誘致に大きな影響を与えていると考えたが、調査の結果、そういった資源は国際会議の誘致に大きな影響を与えたわけではなく、国際会議の開催段階において参加者に地域の魅力を発信する力があることがわかった。そういった地域資源の活用は誘致の目的に至らないが、開催地の魅力発信に繋がり、会議参加者が後日、個人旅行での再訪や当該都市の魅力の海外への発信などに役に立つと考えられる。

第4章 3CBの誘致事業、調査・企画事業の展開

4-1 目的

全体的に、松江、福井、山形コンベンションビューローが誘致事業、支援事業、調査事業、企画事業、広報宣伝事業という5つの事業を中心にMICEの誘致・開催に取り組んでいる。そのうち、国際会議の誘致に対して、誘致事業や調査企画事業がほかの事業より国際会議の誘致に役立つと考え、また、ほかの事業について、3都市は大体同じようなことをしており、それほどの違いが見られない。そのため、本章では、松江、山形、福井のCBの誘致事業、調査・企画事業の精査を通じて、2005～2015年まで11年間の事業経緯を年表化することにより、各CBが取り組んでいる誘致、調査・企画事業の傾向や展開等を見て、今後地方都市で国際MICEをよりよく推進していく提言を行うことを目的とする。

4-2 3CBの誘致事業の取り組み

3CBの11年間の誘致事業経緯を把握するために、3CBが提供してくれた11年分の事業報告書をもとに、以下の3つのコンベンションビューロー誘致事業の比較の表を作った。

表4-1、4-2、4-3において、AはCB同士の取り組みや会議情報の共有のための連携事業、BはPR事業で、詳細はB⁻が当該地域内のコンベンションに関連主体に対するPR事業、B⁺が国内会議主催候補者に対するPR事業、B⁺が海外会議主催候補者にPRする事業、CがCBの立地地域へのキーパーソンの招聘事業である。

3つのCBの誘致事業は、CB同士の取り組みや会議情報の共有のための連携事業、CBの支援内容等取り組みを当該地域内のコンベンションの関連主体、国内会議主催候補者及び海外会議主催候補者にPRする事業、CBの立地地域へのキーパーソンの招聘事業の3つに分けられることがわかった。

松江CBはこの3つの項目について、継続的に11年間地道に誘致事業を行っている。CB同士の連携事業については、松江近郊の都市のCBやコンベンショ

ン推進機関だけではなく、遠方の CB との連携が多い。2013 年から松江 CB は海外主催候補者を誘致するため、国際コンベンション誘致活動を始めた。また、この 11 年間、松江 CB は継続的にキーパーソン招聘事業をやっており、数は徐々に増えている。

表 4-1 松江 CB の誘致事業

年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	
A		つくば・国際・民立会 コンベンション										
		6都市管轄協議会(旭川、秋田、前橋、岐阜、 別府、松江)										
				7都市管轄協議会の開催(旭川、秋田、前橋、岐阜、松江、姫路、鹿児島)								
	同右						中国・西国地区コンベンション推進協議会新 推進委員会					
											(前橋、つくば、秋田、民立、国際、つくば、秋田、別府、松江、姫路、鹿児島) つくば市と前橋、別府、マニ ピュレーターとの間で提携	
B			国際会議海外キーパーソン協議会									
			国際会議支援セミナー									
			ミーティングEXPOへの出展									
B+									「韓国国際会議キーパーソンセミナー」			
									Korea MICE Expo			
									Japen国際コンベン ションセミナー			
									アジア・太平洋地域 国際会議セミナー			
									MICE Journ 2014			
											国際会議主催者セミナー(シ ンガポール)	
C	キーパーソン などの招聘工作	3件	3件	3件	5件	6件	7件	15件	3件	5件	12件	

凡例	A	CB同士の取り組みや会議情報の共有のための連携事業	B	国内会議主催候補者にPRする事業
	C	CBの立地地域へのキーパーソンの招聘事業	B+	海外会議主催候補者にPRする事業

表 4-2 山形 CB の誘致事業

年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
A											
B	医学部	工学部									
	山形大学でのビューロー事業説明会の開催										
	宮城・山形・仙台・広域圏・コンベンション推進協議会										
	東日本管轄協議会との意見交換										
B											
C											

凡例	A	CB同士の取り組みや会議情報の共有のための連携事業	B	国内会議主催候補者にPRする事業
	C	CBの立地地域へのキーパーソンの招聘事業	B-	CBの取り組みを該当地域内のコンベンション関連主体にPRする事業

表 4-3 福井 CB の誘致事業

年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
A	中国・四国地区コンベンション誘致協議会設立										
	北陸三県コンベンション誘致協議会連合会及び講演会										
	中部コンベンション連絡会議						同左				
B						コンベンション推進協議会設立の開始			同左		
					コンベンション市町連絡会			同左			
						滋賀県コンベンション誘致促進会議					
B							滋賀県でのコンベンション開催前夜プレゼンテーションの実施				
			東海北陸等観光促進								12月 上野国トラベルポート開設
	ミーティングEXPOへの出席										
C			キーパーソンへの招聘								

凡例	A	CB同士の取り組みや会議情報 の共有のための連携事業	B	国内会議主催候補者にPRする事業
	C	CBの立地地域へのキーパー ソンの招聘事業	B-	CBの取り組みを該当地域内のコン ベンション関連主体にPRする事業

(3CB の 2005 年～2015 年まで 11 年分事業報告書より作成)

山形 CB については、地域内向きの PR 事業で、地域での人脈づくりができてから、大都市への PR 事業や CB 同士の連携事業、キーパーソン招聘事業について、この 4 年間で一層注力し、徐々に誘致事業を戦略的に展開していた。

福井 CB について、11 年間継続的に CB 同士の連携事業、地域内のコンベンション関連主体との情報交換や PR 事業、また国内主催候補者への PR 事業に取り組んでいた。近年大都市への PR 事業に力を入れ、今後の戦略につなげる取り組みが見られた。

CB 同士の連携事業については、3 つの CB が 11 年間継続的に取り組んでいる。今後、当該都市の近くの地区の CB やコンベンション推進機関との連携だけではなく、遠方の地域の CB と連携にも注力すべきだと考えられる。また、山形 CB、福井 CB の PR 事業はまだ日本国内だけに行っているが、松江 CB は積極的に日本国内で開催した海外キーパーソン商談会や直接海外の国際コンベンション誘致活動に参加し、国際会議の誘致に力を入れていることがわかった。

4-3 3CB の調査・企画事業の取り組み

3つのコンベンションビューローの2005年～2015年まで11年間の調査・企画事業の経緯を把握するために、3CBから提供を受けた11年分の事業報告書をもとに、以下の3つのコンベンションビューロー調査・企画事業の比較の表を作った。

表 4-4 松江 CB の調査・企画事業の比較

年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
調査	コンベンションデータの収集と更新										
									POO・エージェンシーによる誘致活動調査		
			アンケート調査								
				コンベンションアンケート実施と結果発表							
							韓国・中国への革命都市調査事業				
								コンベンションアンケートの実施・分析			
企画		同右						くにびきメッセ賛助会員等意見交換会			
		くにびきメッセファンクラブ交流会の実施									
				地方都市コンベンション促進委員会							
			島根・つばき研究センターネットワーク組合への参加								
				国際観光コンベンションフォーラムへの賛助会員							

表 4-5 山形 CB の調査・企画事業の比較

年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
調査	コンベンションの動向に関する調査研究										
			海外コンベンション事業の調査								
			海外都市視察の実施								
		国際観光分科会工学会においてアンケート調査			コンベンション主催者及び参加者へのアンケート						
					コンベンションの開催による経済波及効果の調査						
	大卒行旅者数調査報告に所し、調査を実施する件	95	119	159	184	129	101	157	142	129	113
企画							飲食店ガイドの企画・制作及び配布				
							山形紹介DVDの制作及び貸出				
							コンベンションネットワーク会館開催			同左	

表 4-6 福井 CB の調査・企画事業の比較

年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
調査	データベースの作成・更新事業										
						同右		コンベンション開催予定調査			
				コンベンション経済波及効果の調査調査							
企画				コンベンション事業検討委員会設置及び開催							

(3CB11年間の事業報告書より作成)

調査・企画事業については、表 4-4、表 4-5、表 4-6 に示した。国際会議の開催状況やニーズといった調査事業は 3CB で同様に継続的に行われ、CB の基本業務であることが推察された。山形と福井 CB が当該地域における各種団体、施設

にコンベンション開催予定や開催動向に関する調査を行い、各自のデータベースを作成・更新している。松江については、コンベンションの新たな領域を開拓するため、近年 PCO やエージェントによる誘致活動も取り組みはじめた。また、各 CB が会議開催後の効果を把握するため、コンベンション主催者や参加者へのアンケート調査、コンベンション開催による経済波及効果を測定・分析する調査を行った。

企画事業については、松江 CB が継続的にくにびきメッセファンクラブというキーパーソンとのネットワーク構築事業を行っている。山形 CB はここ数年でいろいろなイベントを実施しており、誘致事業と同様に違いが見られた。

調査対象とした3つの地方中小都市のCBにおける様々な取り組みや戦略的展開の違いは、国際 MICE の開催実績数の差等の相関を現時点では少し見られたが、松江 CB など、強みを持っている地元大学・研究機関がなくても実績を上げていることから、取り組みの効果が数年後に現れることが推察された。

4-4 3CB の県内外主催者への誘致訪問回数

コンベンションビューが国際会議を誘致するため、CB 同士の連携による情報交換やキーパーソンからの情報提供、コンベンション開催予定調査等を通じて、コンベンション開催の情報を獲得し、コンベンション主催候補者に誘致訪問活動を行う。コンベンションビューローの各主体への誘致訪問回数が国際会議の誘致に影響を与えるかということを解明するため、各 CB が提供してくれた11年分の事業報告書に掲載されているCBの各主体への訪問件数をもとに、3つのCBの地元主催者と首都圏など大都市主催者への誘致訪問回数比較図を作った。

CB の県内外の誘致訪問回数(図 4.1～4.3)は、実線が県外への誘致訪問で、点線が県内への誘致訪問である。また、柱状図は国際会議の開催回数である。

松江においては(図 4.1)、2005～2007 年まで、誘致訪問回数が増えたため、その効果は 2007～2008 年までの国際会議の開催回数が伸びた。2011 年から、訪問回数が再び増えると、国際会議の回数も増えている。この11年間松江 CB が地元主催者への誘致訪問回数が減っており、首都圏や関西、中国地方など県外の主催者への訪問件数が増えていることがわかった。これは松江では、国際



図 4.1 松江 CB 県内外への誘致訪問回数比較と 2005～2014 国際会議開催回数
(松江 CB の 2005～2015 年まで 11 年間の事業報告書より作成)

会議の誘致に役立つ大学や研究機関などの組織、地場産業などが存在しないため、松江 CB が誘致の重点を県外の研究者とのネットワークの構築に置いたことに関係あると考えられる。

山形においては(図 4.2)、県内への誘致訪問回数が圧倒的に多く、県外への誘致訪問があまり行っていない。その結果、国際会議の開催回数はあまり伸びていない。2005 年～2009 年まで、山形 CB の地元主催者への誘致訪問件数が急速に増えた。これは表 4-2 に書いたように、2005 年～2009 年までに山形 CB が地域のコンベンション関連主体との連携や山形 CB の取り組みを地域内に PR することに力を入れて取り組んできたからだと考えられる。また、2009 年から、地元主催者に対する誘致訪問は毎年大体 300 以上の件数が行われている。これに対して、首都圏や仙台圏等県外主催者に対する訪問回数が毎年 50 件くらいで、ここから、山形 CB の MICE 誘致の重点はまだ地元の主催者に置いていると推察された。

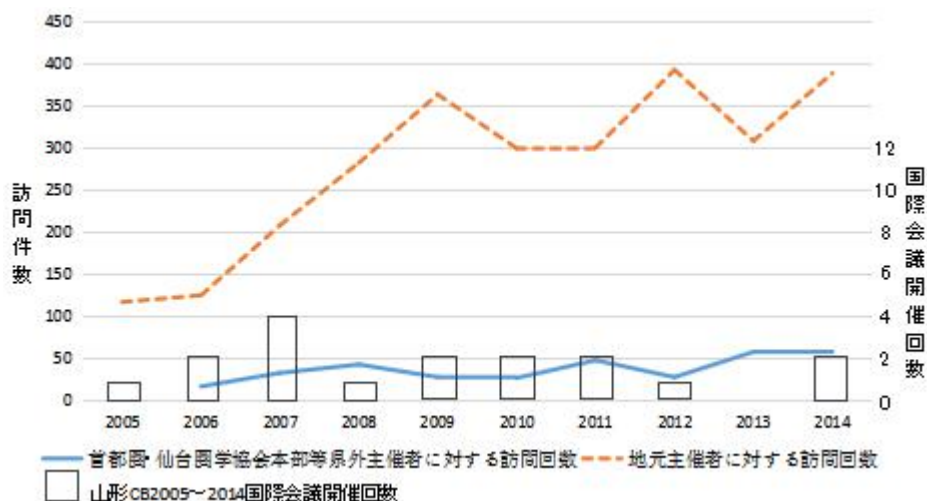


図 4.2 山形 CB 県内外への誘致訪問回数比較と 2005～2014 国際会議開催回数
(山形 CB の 2005～2015 年まで 11 年間の事業報告書より作成)

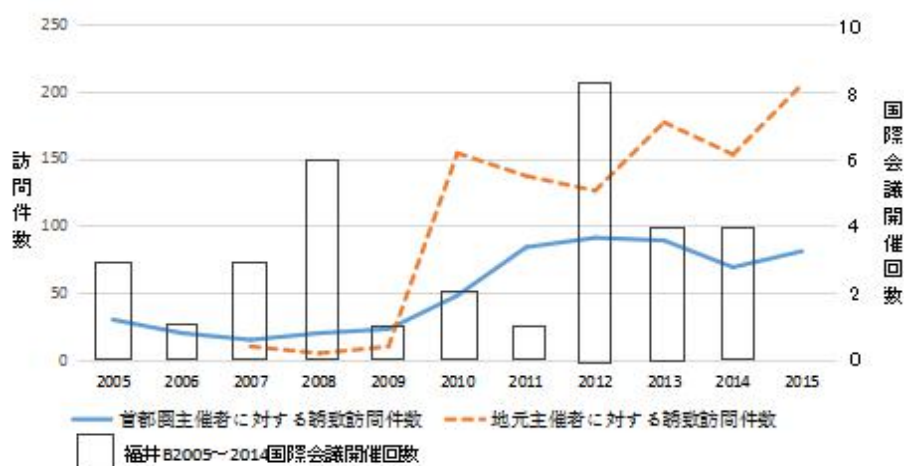


図 4.3 福井観光 CB 県内外への誘致訪問回数比較と 2005～2014 国際会議開催回数
(福井 CB の 2005～2015 年まで 11 年間の事業報告書より作成)

福井では(図 4.3)、最初に開催回数が多かったが、2005～2009 年まで、誘致訪問があまりやっていなかったため、2009～2011 年の開催回数が落ちていた。2009 年以後、県内外への誘致訪問回数を増やすと、国際会議の開催回数も増えている。

この 10 年間 3CB の国際会議の開催回数から見れば、山形 CB の国際会議の開催回数は年 2 回くらいで、大きな変化は見られなかった。松江、福井 CB の国際会議の開催回数は 10 年間に大きな変動があったが、年間開催回数は大体 2 回以上で、近年山形での開催回数をはるかに上回っている。

10 年間の国際会議開催回数が最も多い松江 CB の首都圏主催者への訪問回数がほかの 2 都市より非常に多く、また、首都圏や地元の主催者両方への誘致訪問を行う福井 CB の国際会議の開催回数も多い。これに対して、地元主催者を中心に誘致訪問を行う山形 CB の国際会議の開催回数が少ないため、地方都市における国際会議の開催回数は各 CB の誘致訪問対象と誘致訪問回数に関係あると考えられる。今後の地方都市の CB が主催者への誘致訪問をする際に、地元的主催者に注目するだけでなく、首都圏や他の大都市の主催者への誘致訪問も増やすべきだと筆者は考える。

第 5 章 学術会議を中心とする地方都市の国際会議誘致のモデルになる仕組み

5-1 調査のまとめ

第 2 章はまず、JNT0 の日本コンベンションガイドブックに掲載されている都市のうち、地方中小都市と考えられる規模の人口 10～30 万人のなかで、2010 年以降主な国際会議の開催件数（予定も含む）が突出している上位 4 位までのコンベンションビューローを有する都市（松江市、福井市、山形市、つくば市）を俯瞰した。このうち、つくば市は、教育研究機関が集積し、2005 年～2014 年までの国際会議開催回数（645 回）がほかの都市をはるかに上回っている（JNT0「国内都市別国際会議開催件数一覧表」より）ことから、特異な状況であることを考慮し、研究対象から除外した。地方都市における MICE の概要を把握し、研究対象とする松江 CB、福井 CB、山形 CB を抽出した。

第 3 章では、3 都市（松江市、福井市、山形市）の CB を対象に、国際 MICE の誘致・開催に影響を与える要因について明らかにした。

プレ調査として、EXPO ミーティング 2016 に集まる人口 10～30 万人の地方都市の CB 担当者に MICE の取り組み現状についての簡易インタビュー調査により、

1) MICE の誘致段階と開催段階で視点が異なること、2) CB 担当にとっては、MICE 開催の必須条件は、会場施設、宿泊施設、アクセス整備を共通に挙げることがわかった。また、MICE の誘致に影響を与える要因としては、3) 地元大学の研究者との人脈や、4) 国際会議のテーマに関連した分野に関する地域に特徴的な地場産業や自然資源等があること等が挙げられた。

そこで、これらを参考に設計した半構造化インタビュー調査を第 2 章で抽出した 3 都市の CB に対して行い、ハード面の整備状況、CB が行っている業務、MICE の誘致に大きな役割を果たしている地場産業・地域組織の存在、エクスカーション（視察や懇親会）の企画・運営内容、その他工夫点を把握した。その結果、①地方都市においては MICE のうち学術会議を中心とする国際会議を重視していることが確認され、②国際会議の「誘致段階」において、地域内研究機関等の研究者のキーパーソンとの人脈構築が非常に重要であること。③そのような研究機関が地元にはない場合は、地域の外の研究者との人脈づくりを積極的に行う仕組みを工夫していること等がわかった。また、エクスカーションの部分は「誘致段階」においては一般には重要な要素ではないことがわかった。

第 4 章では、松江市、山形市、福井市の CB の 2005 年～2015 年の事業報告書入手し、この内の主に誘致事業、調査・企画事業の精査を通じて、今後地方都市で国際 MICE を推進するための知見を得て、提言を行った。

11 年間の事業経緯を年表化することにより、各 CB が取り組んでいる誘致、調査・企画事業の傾向や展開、戦略性の有無が明らかになった。誘致事業は、大きく①各都市の CB 同士の取り組みや会議情報の共有のための連携事業、②CB の取り組みを当該地域内の関連主体や国内・海外の会議主催候補者に PR する事業、③CB の立地地域へのキーパーソンの招聘事業、の 3 つに分けられた。松江 CB はこの 3 項目について、ほぼ継続的に 11 年間地道に誘致事業を行っている。山形 CB は、②の地域内向け PR 事業で人脈を構築後、大都市への PR 事業や CB 同士の連携事業、キーパーソン招聘事業にこの 4 年で一層注力し、徐々に誘致事業を戦略的に展開していた。また、福井においては、11 年間継続に CB 同士の連携事業、地域内のコンベンション関連主体との情報交換や地域内向け PR 事業、また国内主催候補者への PR 事業に取り組んでいた。近年大都市への PR 事業に力を入れ、今後の戦略につなげる仕組みが見られた。

次に、調査・企画事業については、国際会議状況やニーズといった調査事業は 3CB で同様に継続的に行われ、CB の基本業務であることが推察された。一方、企画事業は、継続的に取り組む松江 CB、ここ数年実施している山形 CB など、誘致事業と同様に違いが見られた。調査対象とした 3 つの地方中小都市の CB におけるこれらの取り組みや戦略的展開の違いは、国際 MICE の開催実績数の差などの相関を現時点では見ることはできなかったが、松江 CB など、地元大学・研究機関がなくても実績を上げていることから、取り組みの効果が今後に現れることが推察された。今後、地方中小都市が国際 MICE 誘致の際に、営業誘致訪問活動は地元の主催者への誘致訪問に限らず、首都圏、関西等大都市の主催者への訪問回数も増やすべきだと考える。また、誘致訪問活動に必要な情報を獲得するため、CB 同士の情報交換連携事業、国内主催者への PR 事業、海外主催者への PR 事業等に力を入れるべきだと考える。

5-2 学術会議を中心とする地方都市の国際会議誘致のモデルになる仕組みへの提言

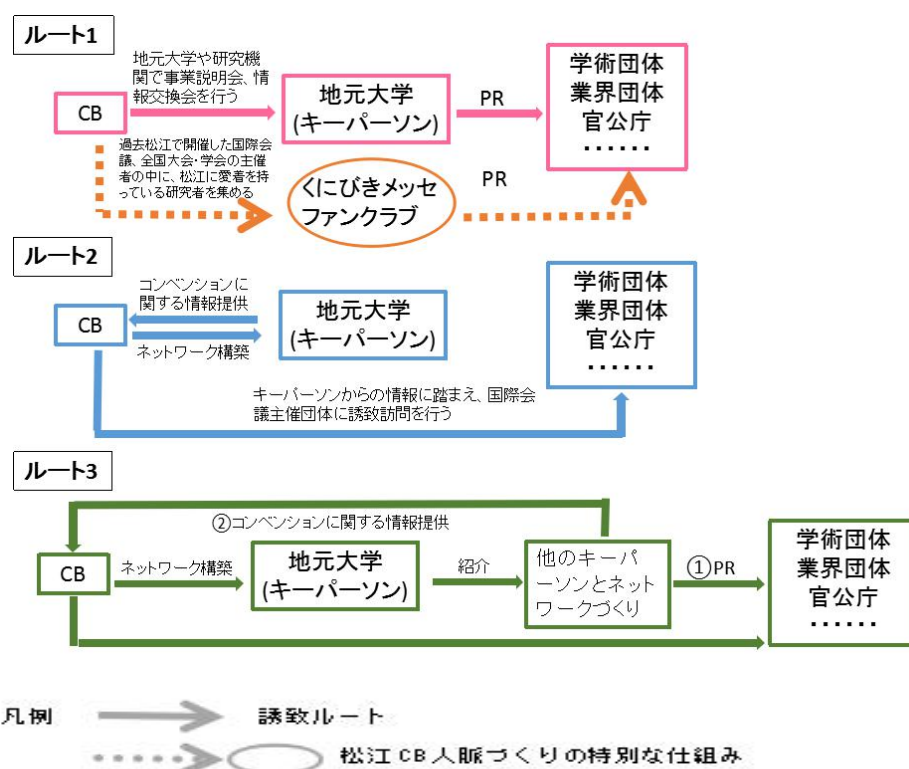


図 5.1 学術会議を中心とする地方都市の国際会議誘致仕組み

今回の調査により、人口 10 万～30 万人の地元に強い大学や研究機関が存在する地方中小都市において、学術会議を中心とする国際会議の誘致形式は 3 つの形に分けられる。ルート 1 は地方中小都市の CB が地元の大学や研究機関に事業説明会や情報交換会を行い、地元の研究者とのネットワークを構築する。ネットワーク構築した地元の研究者がキーパーソンとして、所属する学会に PR してもらう。ルート 2 は CB がキーパーソンから情報を得て、国際会議主催団体へ誘致訪問を行う。ルート 3 はキーパーソンである研究者がまた別の研究者を紹介してもらう。新しいキーパーソンとの人脈づくりができ、新しいキーパーソンが学会に PR してもらい、また、新しいキーパーソンから国際会議のに関する情報を得て、CB が国際会議主催団体へ誘致訪問を行う。

松江においては、地元に強い分野を持っている大学や研究機関がないため、自らの独特な誘致仕組みを作った。それは過去松江で開催した国際会議、全国大会・学会の主催者の中に、松江に愛着を持っている研究者を集め、くにびきメッセファンクラブを作成した。このファンクラブに所属する先生が大部分は首都圏や大阪など大都市の研究者で、この仕組みで地元の強い大学や研究機関がなくても、首都圏や大阪など大都市の研究者とのネットワークを構築できる。キーパーソンができると、その誘致方法はルート 1、2、3 の誘致方法と同じである。

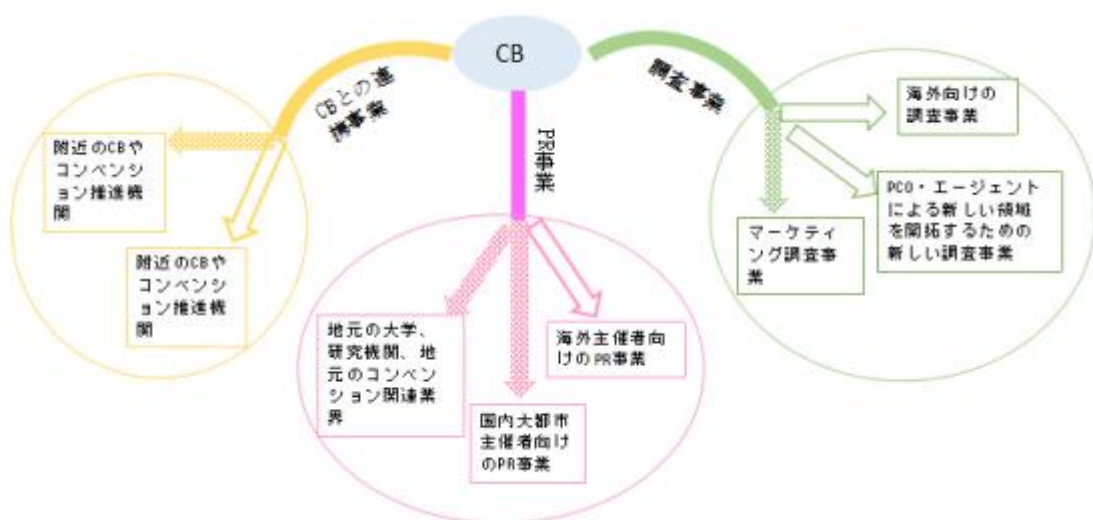


図 5.2 CB が国際会議の主催者に誘致訪問を行うための国際会議に関する情報取得対象

CB が国際会議の主催者に誘致訪問を行うためには、国際会議に関する情報が必要である。福井、山形 CB は地元向けの PR 事業、国内大都市向けの PR 事業、地元のコンベンションマーケティング調査、地域附近の CB 同士との連携事業に重点を置いている(図 5.2 の実線の矢印)。

松江 CB は情報を取得するために、CB 同士との連携事業について、自都市の近くの地区の CB やコンベンション推進機関との連携だけではなく、遠方の CB やコンベンション推進機関との連携による情報交換を行っている。また、海外展示会、キーパーソン商談会などへの参加することで海外主催者向けの PR 事業、海外への視察や PCO・エージェントによる誘致調査など新しいマーケティング調査事業なども行っている(図 5.2 の白抜き矢印)。

学術会議を中心とする地方都市の国際会議の誘致について、地元が強みとなる大学や研究機関が存在する場合は、キーパーソンとの人脈づくりや国際会議に関する情報の獲得のための連携事業、PR 事業、調査事業などの取り組みについて、基本的に地元を中心に展開している。そういった大学や研究機関がない場合は、人脈づくりや情報収集の取り組み等について、日本国内の大都市や海外に注力するという傾向が見えた。

学術会議を中心とする国際会議の誘致段階において、最も大事なものはキーパーソンとの人脈づくりと会議主催者への誘致訪問を行うための国際会議に関する情報の取得だと考えられた。また、国際会議の開催段階において、地方都市ならではの観光資源が国際会議誘致に一般的に重要な要素ではないが、「開催段階」において、開催地の魅力発信に繋がり、会議参加者が後日、個人旅行での再訪や当該都市の魅力の海外への発信などに役立つと考えられる。

謝辞

本研究を進めるに当たり、指導教員である川原晋教授、並びに平田徳恵特任助教には、2年間に渡り常に暖かいご指導ご鞭撻を賜った。また、副査の清水哲夫教授、直井岳人准教授をはじめ観光科学域の全教員の皆様から多大なるご助言やご指摘、お励ましを戴いた。松江コンベンションビューロー、福井観光コンベンションビューロー、山形コンベンションビューローの関係者の各位には、ヒアリング調査や資料の提供を快く応じていただいた。以上の方々をはじめ、日常の議論を通じて多くの示唆を下さった首都大学東京大学院観光科学域の学生の皆様にも、心から感謝の意を表す。

参考文献・資料

- ・ 松本 純, 2016, 「MICE 機能を通じた都市地域マネジメントの展開」, つくば大学社会システム・マネジメント, 社会工学域, 理工学群社会工学類都市計画主専攻卒業論文
- ・ 岩崎邦彦, 2011, 「地方都市の MICE 振興戦略-静岡県の取り組みからの示唆」, 観光研究 22(2), 14-17, 2011-03 日本観光研究学会
- ・ 観光庁, 2016, 「地域の特性を活かした MICE の推進に係る調査事業報告書」
- ・ 三村正法, 2014, 北海道大学経済学部, 経営学科卒業論文, 「地方都市の MICE 成功の条件分析ーラリー北海道事例分析ー」
- ・ 観光庁, 2016.3, 国内モデル都市事例紹介集(MICE), 「地域の特性を活かした MICE の推進に係る調査事業報告書」
- ・ JNTO, 「国内都市別 国際会議開催件数 一覧表」
- ・ 日本政府観光局(JNTO), 2015, コンベンション誘致部, 「日本コンベンション都市ガイド ー施設の概要と公的支援ー」
- ・ 総務省ホームページ
- ・ 山形コンベンションビューローホームページ
- ・ 福井観光コンベンションビューローホームページ
- ・ 松江コンベンションビューローホームページ
- ・ つくばの情報は JNTO コンベンションニュース NO.45 [2015 年 3 月]より
- ・ 山形コンベンションビューロー事業報告書 (2005～2015 年)
- ・ 福井観光コンベンションビューロー (2005～2015 年)
- ・ 松江コンベンションビューロー事業報告書 (2005～2015 年)

図表リスト

第 1 章 はじめに

表 1-1 グローバル MICE 都市とグローバル MICE 強化都市の人数

(官公庁のホームページの情報より作成)

図 1.1 「コンベンション参加者満足度モデル」の構造(岩崎, 2011 より)

図 1.2 論文構成図

第 2 章 研究対象地を選択した経緯

表 2-1 都市分類(「MICE 機能を通じた都市地域マネジメントの展開」より)

表 2-2 現在指定都市・中核市・施行時特例市に属する市

(総務省地方公共団体の区分/中核市・施行時特例市より)

表 2-3 国内モデル都市事例紹介

(「地域の特性を活かした MICE の推進にかかわる調査事業報告書 平成 28 年 3 月」より作成)

表 2-4 CB を有する都市 2010 年～2017 年までの主な国際会議開催回数 (「日本コンベンション都市ガイド ー施設の概要と公的支援ー」より作成)

表 2-5 松江 CB2010 年～2017 年までの主な開催実績と今後開催の予定
(「日本コンベンション都市ガイド ー施設の概要と公的支援ー」より作成)

表 2-6 つくば観光コンベンション協会 2010～2017 年までの主な開催実績と今後の開催予定

(「日本コンベンション都市ガイド ー施設の概要と公的支援ー」より作成)

表 2-7 福井観光 CB2012～2017 年までの主な開催実績と今後の開催予定

(「日本コンベンション都市ガイド ー施設の概要と公的支援ー」より作成)

表 2-8 山形 CB の主な開催実績と今後の開催予定

(「日本コンベンション都市ガイド ー施設の概要と公的支援ー」より作成)

表 2-9 2005 年～2014 年まで、松江、つくば、福井、山形 CB の国際会議実際

の開催回数（「国内都市別 国際会議開催件数 一覧表」より作成）

第3章 国際 MICE の開催に影響する要因の分析

表 3-1 3都市の宿泊施設分類

（松江コンベンションビューローパンフレット、福井コンベンション施設・宿泊ガイド、山形コンベンション施設ガイドより作成）

表 3-2 3都市交通アクセス

（松江、山形、福井 CB のホームページ情報より作成した）

表 3-3 3の CB が抱える課題（3CB へのインタビュー調査内容により作成）

図 3-1 松江の国際 MICE 誘致・開催関係図

（松江コンベンションビューローへのインタビュー調査により作成）

図 3-2 福井の国際 MICE 誘致・開催関係図

（福井観光コンベンションビューローへのインタビュー調査により作成）

図 3-3 山形の国際 MICE 誘致・開催関係図

（山形コンベンションビューローへのインタビュー調査より作成）

表 3-4 3CB の構成と行う業務と運営仕組み

（3CB へのインタビュー調査の内容により作成）

表 3-5 3CB が考える国際会議の誘致に重要な要素

（3CB へのインタビュー調査の内容により作成）

表 3-6 エクスカーション部分にかかわる主体とコンテンツの構成

（3CB へのインタビュー調査の内容により作成）

第4章 3CB の誘致事業、調査・企画事業の展開

表 4-1 松江 CB の誘致事業

（3CB の 2005 年～2015 年まで 10 年分事業報告書より作成）

表 4-2 山形 CB の誘致事業

（3CB の 2005 年～2015 年まで 10 年分事業報告書より作成）

表 4-3 福井 CB の誘致事業

(3CB の 2005 年～2015 年まで 11 年分事業報告書より作成)

表 4-4 松江 CB の調査・企画事業の比較

(3CB の 2005 年～2015 年まで 11 年分事業報告書より作成)

表 4-5 山形 CB の調査・企画事業の比較

(3CB の 2005 年～2015 年まで 11 年分事業報告書より作成)

表 4-6 福井 CB の調査・企画事業の比較

(3CB の 2005 年～2015 年まで 11 年分事業報告書より作成)

図 4.1 松江 CB 県内外への誘致訪問回数比較と 2005～2014 国際会議開催回数

(松江 CB の 2005～2015 年まで 11 年間の事業報告書より作成)

図 4.2 山形 CB 県内外への誘致訪問回数比較と 2005～2014 国際会議開催回数

(山形 CB の 2005～2015 年まで 11 年間の事業報告書より作成)

図 4.3 福井観光 CB 県内外への誘致訪問回数比較と 2005～2014 国際会議開催

回数 (福井 CB の 2005～2015 年まで 11 年間の事業報告書より作成)

第 5 章 学術会議を中心とする地方都市の国際会議誘致仕組みの分析と今後の 提言

図 5.1 学術会議を中心とする地方都市の国際会議誘致仕組み

図 5.2 CB が国際会議の主催者に誘致訪問を行うための国際会議に関する情報
取得対象